

2008 年度 リサーチペーパー

高校・大学における女子サッカーの発展に関する研究

-競技力と入試難易度の観点からの考察-

A Study on the Development of Women's Soccer in High Schools and Colleges

--- From the Point of Level of Competition and Relative Difficulty of Entrance Examinations

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

5008A305-9

石山 隆之

Ishiyama , Takayuki

研究指導教員： 平田 竹男 教授

高校・大学における女子サッカーの発展に関する研究

-競技力と入試難易度の観点からの考察-

トップスポーツマネジメント

5008A305-9 石山 隆之

研究指導教員：平田 竹男 教授

日本女子サッカーは代表のオリンピックに向けた強化が実り、前回アテネオリンピックに続き 2008 年にも北京オリンピック出場を果たした。そして本大会でベスト 4 という過去最高の成績を収めるなど近年めざましい発展を遂げている。しかし、ユース年代においてはいくつかの問題を抱えている。

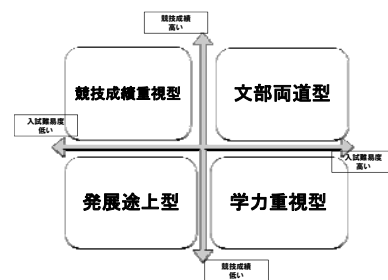
筆者は東京都高体連サッカー部女子委員長、高校女子サッカー部の監督としてユース年代の女子サッカーに関わっている。現在高体連サッカー専門部女子部の加盟校数を増やすよう働きかけをしており、高校年代の競技者数は年々増加傾向にあるが、筆者が担当している選手の中でも、多くの生徒が高校卒業後サッカーから離れてしまうという現状がある。

このような現状を踏まえると、高校生の受け皿である大学女子サッカーが発展することで、大学に入ってからでも女子サッカーを継続する選手が増えると考えられる。

そこで本研究では、大学女子サッカーにおける現状の問題点を明らかにするとともに、我が国における大学女子サッカーのさらなる発展策を探ることを目的とする。

高校生が大学進学を目指す際、将来の進路や自らの興味に合わせて大学を選択する。そして、大学に入学するためには、種別を問わず入学試験などが存在する。そのため、高校生からの進学需要が高い大学は入学試験の難易度もおのずと高くなる。以上の観点から、本研究では女子サッカーの競技力と入試難易

度という 2 つの観点にフォーカスして現在、大学女子サッカーリーグに、どのようなタイプの大学が所属しているのか分析を進めた。また大学女子サッカーの分析の他に、大学側からみた選手の主な供給源である高校サッカーの現状も明らかにする必要があると考えた。よって分析対象は、全国及び地域の加盟校数の割合が高いことなどを理由に、2008 年度関東大学女子サッカーリーグと 2007 年度東京都女子サッカーリーグ高校の部をサンプルとした。問題点を抽出するため、それぞれの競技成績をポイント化し偏差値に換算したものと、入試難易度を偏差値で数値化したものをマトリクス図にプロットしたのち、図のように 4 タイプ分類（※以下の定義参照）し分析した。



※「文部両道型」第 1 象限

ー競技力が高く、入試難易度が高い

※「競技成績重視型」第 2 象限

ー競技力が高く、入試難易度が低い

※「発展途上型」第 3 象限

ー競技力が低く、入試難易度が低い

※「学力重視型」第 4 象限

-競技力が低く、入試難易度が高い

(本論文では、勉学とクラブ活動との両立の意味からあえて「文部両道」とした。)

その分析結果から考察をしたところ、関東大学女子サッカーリーグ加盟大学では学力軸で見た場合、いわゆる「MARCHG (明治・青山学院・立教・中央・法政・学習院の人気私立大学群)」ゾーンの私立大学に女子サッカー部がないことが明らかになった。そして、「文部両道型」が極端に少ないこと、体育やスポーツ系の学部・学科を持つ大学はいずれも高い競技力を有することなども明らかになった。一方、選手の供給源である東京都女子サッカーリーグ高校の部に加盟する高校は、大学リーグ加盟校が偏りのある分布であるのに比べると4タイプに広く均一に分散していることが分かる。以上の考察に加えて、高校受験案内のデータ結果から女子高校生に MARCHG ゾーン受験希望者が多く存在することを考え合わせると、大学女子サッカーの分布の偏りが、多数の生徒が高校卒業後サッカーから離れていく原因の一つとなっていることが伺われる。

また、高い競技実績を有する女子サッカー選手が MARCHG ゾーンを受験希望とする場合に、競技力の低い国立大学を目指すか、女子サッカー部のない私立大学を目指すかのいずれかの選択を迫られることになる。競技力(偏差値)が高い傾向にある大学は多くが体育・スポーツ系学部・学科を持つことを考えると、現在 MARCHG ゾーンにある国立大学の競技力向上は期待することはできない。高い競技実績を有する女子サッカー選手が十分に才能を開花させることは難しい。そのことを考えると、MARCHG ゾーンに私立大学サッカー部を創設することは急務といえるだろう。優秀な人材を少しでも取りこぼすことなく大学サッカ

ーに多く取り込むことは、優秀な才能を持つ選手の発掘の可能性にもつながり、ひいては日本女子サッカーの一層の強化にもなるはずである。

今後の関東大学女子サッカーリーグ加盟大学の分布を予想すると、女子サッカーの認知度の高まりから MARCHG ゾーンにも部が新設されると考えられる。そして MARCHG ゾーンに女子サッカー部が創設されることで、「文部両道型」が極端に少ないという問題点解決に繋がるだろうと考える。またスポーツ系の学部などがない国立大学に新たに部が創設された場合は、「文部両道型」に移行することは考えにくく、現存の大学と共に「学力重視型」を構成すると予想される。「発展途上型」に属する多くの大学は「経営資源」として女子サッカー部を活用する事が考えられる。そして今後も新たに創設の流れは続き「発展途上型」に属する大学のうち、選手・環境・指導者の整備を進めた大学は競技実績を出すだろう。

「競技成績重視型」や「文部両道型」への移行を目指す大学は競争相手が多くなると予想される。そして「発展途上型」と「学力重視型」には、サークル系運動部が増え大学女子サッカー普及の下支えになることを期待する。

女子サッカーのさらなる発展を考えた時、高校卒業後も競技を続けられる環境の整備が必要不可欠であろう。そして今後の大学女子サッカーの役割は、大学女子サッカーがトップアスリートを目指すのみにとどまらない、多種多様な人材の受け皿になることと、女子サッカー界を発展させる人材育成の場となることを期待する。

目次

第1章 序論	5
1.1. 世界の女子サッカー普及	5
1.2. 日本における女子サッカー	5
1.2.1. 日本の女子サッカーの沿革	5
1.2.2. 日本女子サッカーの勝利	7
1.2.3. 日本における女子サッカーの普及	8
1.2.4. 高校女子サッカーの現状	9
1.2.5. 大学女子サッカー	12
1.3. アメリカにおける女子サッカー	13
1.3.1. アメリカ女子サッカーの勝利と市場	13
1.3.2. アメリカ女子サッカーの普及	16
1.3.3. アメリカのカレッジサッカー	18
1.3.4. N C A A	18
1.3.5. カレッジスポーツ型好循環	19
1.4. 問題意識	21
1.5. 研究の目的	22
第2章 分析方法	23
2.1. 分析する前に	23
2.2. 分析手法	23
2.3. 分析対象（大学）	24
2.3.1. 競技成績のポイント化（大学）	24
2.3.2. 入試難易度（大学）	25
2.4. 高校の分析と手法	26
2.4.1. 競技成績のポイント化（高校）	27
2.4.2. 入試難易度のポイント化（高校）	28
2.5. 定義に基づき4つの型に分類する	29
第3章 結果	31
3.1.	31
3.2. 関東大学女子サッカーリーグの入試難易度（偏差値）	32
3.3. 競技力と入試難易度の関係（大学）	33
3.4. 東京都女子サッカーリーグ高校の部の競技力（偏差値）	33
3.5. 東京都女子サッカーリーグ高校の部の入試難易度（偏差値）	35
3.6. 競技力と入試難易度の関係（高校）	36
第4章 考 察	37

4.1. 大学分布と高校分布の特徴	37
4.1.1. 大学	37
4.1.2. 高校	39
4.2. MARCHG ゾーンにおける女子サッカー部創設の必要性	39
4.2.1. サッカーを続けることができない原因	40
4.2.2. MARCHG サッカー部創設の必要性和期待される効果	42
4.2.3. MARCHG 女子サッカー部創設に向けて	44
4.3. 今後の展望（文部両道型／学力重視型）	45
4.4. 今後の展望（発展途上型／競技成績重視型）	48
4.4.1. 新規参入大学は競争時代に	50
4.4.2. 今後の展望（サークル系運動部の下支え）	50
4.5. 近い将来、予想される大学女子サッカー分布	52
4.6. 今後の女子サッカー	53
4.6.1. 「なでしこリーグ」との交流	53
4.6.2. 女子サッカーの逆台形モデル	55
4.6.3. 最後に	59
第5章 結論	61
第6章 参考文献	63
謝 辞	65

図表目次

図 1	女子登録チームの推移	8
図 2	各国の登録人数に占める女子の割合	16
図 3	N C A A の好循環サイクル	20
図 4	分類マトリクス図	30
図 5	大学の分類	33
図 6	高校の分類	36
図 7	大学分布の特徴	38
図 8	高校女子分類マトリクス図	39
図 10	J 高校サッカー部の進学希望内訳	40
図 11	MARCHG 合格者数上位校の分布	43
図 12	MARCHG・国公立の分布予想	46
図 13	順位の変遷	47
図 14	サークル系運動部	51
図 15	近未来の大学女子サッカーの分布	53
図 16	逆台形モデル	57
図 17	女子サッカーにおける逆台形モデル	58
表 1	日本女子代表の成績	7
表 2	都道府県別高体連加盟状況	11
表 3	全日本大学女子サッカー選手権大会成績	13
表 4	アメリカ代表チーム戦績	14
表 5	アメリカワールドカップ試合会場別入場者平均	14
表 6	女性登録数ランキング	16
表 7	競技力のポイント化の方法	25
表 8	入試難易度のポイント化の方法	26
表 9	高校競技力のポイント化の方法	28
表 10	高校入試難易度のポイント化の方法	28
表 11	分類型の定義	29
表 12	関東大学女子サッカーリーグ加盟校の競技力ポイント一覧	31
表 13	関東女子サッカーリーグ加盟校の入試難易度	32
表 14	高校の競技力	34
表 15	高校入試難易度	35
表 16	私立大学合格者割合	41
表 17	定員割れ学部等の減額措置	49

第1章 序論

1.1. 世界の女子サッカー普及

女子サッカーは、アメリカだけでなく多くの国や地域で近年認知度を増し、競技人口も増加し続けている。女子ワールドカップ開催に合わせて、2007 年 9 月 28 日、「第 4 回 FIFA 女子サッカーシンポジウム」が中国上海で開催された。日本サッカー協会（以下 J F A）女子委員長の上田栄治氏の報告によると、加盟 208 協会のうち 200 協会の会長や専務理事が参加、総勢 500 名規模で盛大に行われ、“Future of Football is Feminine” をスローガンに世界からのレポートが届けられた。シンポジウムの報告によれば、世界におけるサッカープレーヤーは 2 億 6,500 万人、そのうち女子の選手数は 2,600 万人であり、割合にすると 10 人に 1 人が女性である。そして、サッカープレーヤーの推移を見ると、2000 年から 2007 年までに 2300 万人増えているが、その間の新しい選手の 5 人に 1 人は女性である。世界の女子サッカーの普及は着実にすすんでいると言える。

1.2. 日本における女子サッカー

一方で日本の女子サッカー界はどのような状況にあるのだろうか。J F Aによると、1999 年度の日本サッカー協会の女子登録数は、男子 20 人に対し女子 1 人の割合であった。近年はその普及が進み、2002 年から 2006 年までに新しく登録された選手の約 6 人に 1 人は女性となっており、世界の女子サッカー人口の増加と同様に、日本でも女子サッカーの普及が進んでいる。しかし、サッカー先進国といわれるアメリカでは 2007 年の協会登録数の 40 パーセント以上が女性の登録¹⁾であるのに対し、日本は 2007 年末日の段階で約 4%あまりにとどまっているのが現状である。アメリカと比べると日本の女子普及率はまだ低い。その増加の潜在性に期待がかかる状況である。

1.2.1. 日本の女子サッカーの沿革

女子サッカーの歴史は浅く、1966 年、神戸女学院中学部に 3 年生によるチームが誕生したのが始まりと言われる。1970 年には神戸 FC が誕生し、1972 年には東京で F C ジンナンが誕生する。その後、チーム数が徐々に増え、地域で小さなリーグが開催されるようになった。

1980 年に女子サッカーの最高峰を決める全日本女子サッカー選手権大会が、男子の

天皇杯にあたる大会として開催される。1981 年に日本女子代表チームとして初の海外遠征を行うが、当時は明確な女子代表チームは存在せず、地域の選抜チームを日本代表として扱っていた。1986 年に本格的な代表チームが結成され、鈴木良平が初の日本代表専任監督に就任した。

1989 年に全国的女子サッカーの強豪 6 チームにより日本女子サッカーリーグが誕生し、略称を JLSL とした。1994 年には J リーグにあわせ、略称を L リーグにあらためる。この頃のチームのほとんどは、専用グラウンドやクラブハウスを持ち、多くのプロ契約選手を抱え、世界からも優秀な外国人が集まる「世界最高の女子リーグ」とまで言われた。そして 1991 年には、第 1 回 FIFA 女子世界選手権（中国大会）に参加するに至った。

しかし、代表チームがアトランタオリンピックを 3 敗で予選敗退し、続くシドニーオリンピックの出場権を逃すと、追い打ちをかけるようにバブル経済の崩壊から企業をバックにしたチームの解散などが起こり、リーグは衰退の危機を迎えた。2000 年からは遠征費などの経費節減を目的に、東西の地域別に分けた方式にあらためるなどの工夫を凝らし、リーグ再興への模索を始める。

2003 年に行われた第 4 回女子ワールドカップへの関心が高まり、女子サッカーは徐々に人気を回復しはじめた。そして、日本代表女子チームは、2004 年のアジア最終予選を勝ち抜き、アテネ五輪の出場権を獲得し本大会でベスト 8 の活躍を見せた。そして決勝トーナメント進出を果たすと、日本の女子サッカーは急速に認知度を増し、発展に弾みをつけた。「なでしこジャパン」の名前とともに女子サッカーは日本国内に浸透することになり、リーグ戦に対する注目も集まるようになった。

89 年から始まった日本女子サッカーリーグは、J リーグにならい 94 年から L リーグに改称し、さらに 2006 年度には「なでしこリーグ」と改められた。2008 年度は新たにトップパートナーにプレナスを迎え、「プレナスなでしこリーグ」となった。1 部は 8 チーム 3 回戦総当たり、2 部は 9 チーム 2 回戦総当たりのリーグ戦を展開する。「なでしこリーグ」は、セミプロリーグである。選手は社会人、大学生が主体だが、高校生も所属しており、チームによっては中学生がメンバーに入っているチームもある。2008 年北京オリンピックの活躍を背景に、女子サッカーリーグは人気を回復しつつ新たな局面を迎えている。

現在の所属チームは以下の通りである。

【ディビジョン 1 参加チーム】

東京電力女子サッカー部マリーゼ（マリーゼ）

浦和レッドダイヤモンズレディース（浦和）

日テレ・ベレーザ（ベレーザ）

アルビレックス新潟レディース（新潟 L）

伊賀フットボールクラブくノ一（伊賀 FC）

TASAKIペルーレFC (TASAKI)

INACレオネッサ (INAC)

岡山湯郷Belle (湯郷ベル)

【ディビジョン2参加チーム】

ASエルフェン狭山FC (AS狭山)

ジェフユナイテッド市原・千葉レディース (JEFL)

大原学園JASSRA女子サッカークラブ (大原学園)

清水第八プレアデス (清水第八)

バニーズ京都サッカークラブ (バニーズ)

スペランツァF.C.高槻 (FC高槻)

福岡J・アンクラス (福岡AN)

ルネサンス熊本フットボールクラブ (R熊本)

※鹿児島鴨池フットボールクラブアサヒナ (アサヒナ)

※は準加盟

1.2.2. 日本女子サッカーの勝利

日本女子代表の勝利について、FIFA 女子ワールドカップ、オリンピック、アジア競技大会の成績をまとめると、以下の表になる。日本女子サッカーの目標とする勝利はオリンピックであり2004年を境にその実績を伸ばしている状況である。

表 1 日本女子代表の成績

FIFA女子ワールドカップ			オリンピック			アジア競技大会		
開催年度	開催国	日本の成績	開催年度	開催国	日本の成績	開催年度	開催都市	日本の成績
1991	中国	グループリーグ 敗退	1996	アトランタ	予選リーグ敗退	1990	北京	準優勝
1995	スウェーデン	ベスト8	2000	シドニー	不参加	1994	広島	準優勝
1999	アメリカ	グループリーグ 敗退	2004	アテネ	ベスト8	1998	バンコク	3位
2003	アメリカ	グループリーグ 敗退	2008	北京	ベスト4	2002	釜山	3位
2007	中国	グループリーグ 敗退				2006	ドーハ	準優勝

日本女子代表の飛躍のターニングポイントとなったのは、2004 アテネオリンピックアジア地区最終予選の対北朝鮮戦であろう。国立競技場に集まった観客は 31,324 人。放送視聴率は関東エリアの平均視聴率で 16.3%を記録、最高瞬間視聴率にいたっては実に関東地区で 31.1%を記録した。これまでの日本の女子スポーツの観客動員やテレビ中継などのメディア露出の常識を破るものであり、この試合の興業面での成功と勝利は、日本女子サッカーの発展にとって大きく寄与したと言える。

現在「なでしこジャパン」と称される日本女子代表チームの通算成績は、113 勝 32 分 93 敗で世界ランキングは 9 位、AFC 内ランキングは 2 位である。

1.2.3. 日本における女子サッカーの普及

JFA で登録制度がスタートしてからのチーム数の推移はグラフ（図 1）のとおりである。さらに日本の女子サッカーの普及状況（登録チーム数）を 5 つの成長段階期にわけ、先述した事柄も含め歴史的なポイントとともにまとめた。

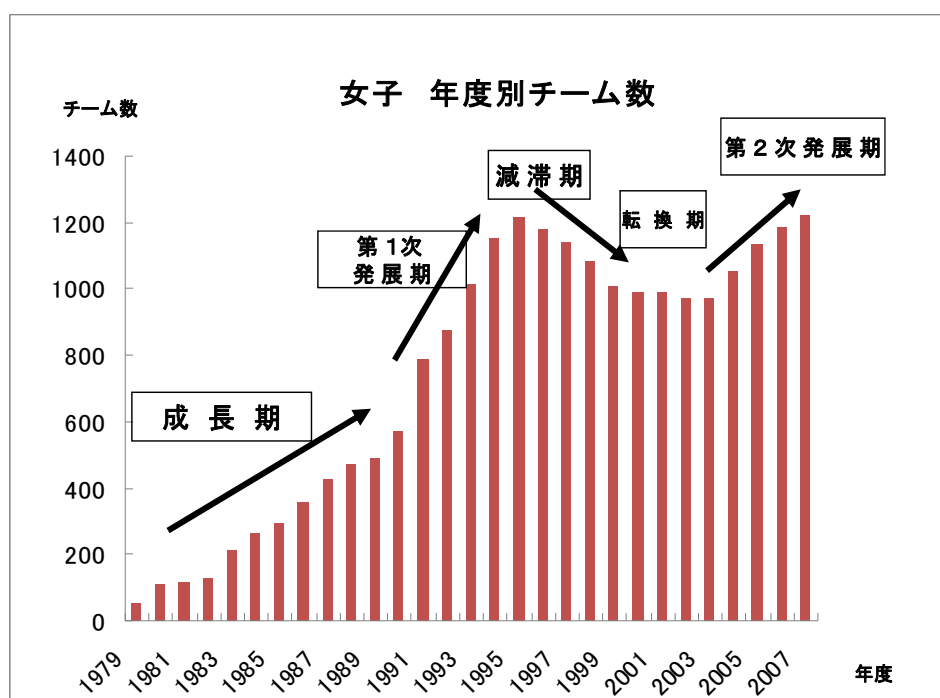


図 1 女子登録チームの推移

チーム数は同じ割合に増加しているわけではなく、その時代ごとに発展または衰退の時期がある。成長期、第 1 次発展期、減滞期、転換期、そして第 2 次発展期に分類する

ことができる。

○成長期：1978年に日本女子サッカー連盟が設立され、1981年にアジア女子サッカー選手権に向けて初代表が結成された。そして1989年、第1回日本女子サッカーリーグが開催され翌1990年に第11回アジア競技大会出場を果たす。順調に普及が進んだ時期である。

○第1次発展期：1993年Jリーグが開幕しサッカーブームが起こる。当時のトップリーグのLリーグは「世界最高の女子リーグ」と呼ばれるほどの隆盛の時代を迎え、普及の加速度が増す時期であった。なお女子サッカーが初めて正式種目となった1996年アトランタオリンピックの出場を果たした。

○減滞期：一時のJリーグブームも落ち着いてきた。1996年アトランタ3戦全敗で終え、1998年Lリーグ企業等の撤退により、10チームから8チームへ縮小されるなどの経済状況の影響を受ける。2000年のシドニーオリンピックの出場を逃し、増加傾向にあったチーム数も減少に転じていった。

○転換期：FIFA女子ワールドカップUSA1999において「サッカーの将来は女性の手に」というスローガンが掲げられ、ロサンゼルス宣言を採択する。それを受けてJFAでは2001年女子プロジェクトが発足し、特に中学年代のチーム数の減少の問題に取り組んだ。また、女子代表もオリンピックに向けた強化が実り、アトランタへの出場権を獲得する。代表チームの愛称を「なでしこジャパン」とし女子サッカーの普及、発展の転換期となる時期であった。

○第2次発展期：2007年、北京オリンピック最終予選突破を果たし、2008年大会では予選リーグを突破し、ベスト4という過去最高の成績を収めた。また同年にニュージーランドで行われたFIFAU-17女子ワールドカップでは、ベスト4の成績を収めるなどの活躍を見せ、現在、普及の充実が勝利に結びつく傾向にある時期といえる。

1.2.4. 高校女子サッカーの現状

高校チームについて述べる。2007年現在、全国の高等学校女子サッカー部のチーム登録状況を表に示したのが、以下の表2にある都道府県別高等学校体育連盟加盟状況である。各都道府県別にみると、高校年代のチーム数の普及状況にはばらつきが見られる。中には、加盟5校にも満たない県もあり、大都市圏と地方では加盟状況が大きく違う。

今後の課題は全ての都道府県に女子サッカー部を創設し、全都道府県に高等学校体育連盟（以下高体連）を組織することにあるが、年々そのチーム加盟数は増加傾向にあり高校年代の普及は進んでいる。

地区別にみると関東地区の普及が進んでいるが、その成功要因について触れる。これは、小学生年代の女子チームの普及が進んでいることが理由に挙げられる。また 2009 年で 15 回目を数える普及を狙いとした「めぬまカップ」という親善大会が開催されている。大会は 4 泊 5 日のスケジュールで行われ、リーグ戦、順位決定トーナメント戦と、全チームが合計 8 試合を消化する。全国各地から 48 チームが埼玉県熊谷市に集まるこの大会は、埼玉県高体連女子サッカー部の一部の教員の尽力により開催に至った。別名高校女子サッカー春の選抜大会といわれるように発展している大会だ。

このような地域密着型とでも言うべき親善大会開催の他に、地元高校教員が中心となって、各学校に女子サッカー部創設を働きかけるなどしたり、練習試合などを積極的にマッチアップしチーム育成の手助けをするなどした経緯もあり、その普及と育成活動が地域のチーム数増加に結びついていると言える。

表 2 都道府県別高体連加盟状況

北海道	北海道	文教大明清・室蘭大谷・札幌第一・札幌稲西・帯広北・札幌東商業・帯広南商業・札幌北斗・函館稜北・札幌大谷	10	10
東北	青森	青森中央・三本木・三本木農業・三沢・百石・千葉学園・青森南	7	46
	岩手	大槌・水沢・専修大学北上・釜石南・久慈東・不来方・岩手女子・宮古商業・遠野情報・花北青雲・宮古・福岡	12	
	宮城	市立女子商業・尚綱学院女子・聖ウルスラ学院英智・聖和学園・仙台育英学園・常盤木学園・南光学園東北・朴沢学園明成・気仙沼西・第一女子・登米・古川黎明・松山・広瀬	14	
	山形	鶴岡北・鶴岡中央・山形西・山形城北・酒田中央・羽黒・米沢中央	7	
	福島	富岡・平商業・白河旭・磐城桜ヶ丘・あさか開成・小野	6	
関東	茨城	日立第二・常磐大学・水戸第三・那珂湊第一	4	124
	栃木	宇都宮女子・宇都宮文星女子・作新学院・佐野女子・栃木翔南・小山城南・大田原女子・栃木女子・宇都宮中央女子・宇都宮短期大学付属・白鷗大学足利	11	
	群馬	館林女子・渋川女子・太田市立商業・高崎商科大学附属・桐生女子・高崎健康福祉大学高崎・太田女子・沼田女子・前橋女子・高崎女子・伊勢崎市立伊勢崎・伊勢崎清明・新島学園	13	
	埼玉	庄和・大宮南・山村女子・入間向陽・埼玉平成・和光国際・佐藤栄学園埼玉栄・熊谷女子・越ヶ谷・久喜・市立川口総合・淑徳与野・大宮開成・松山女子・本庄第一・浦和明の星・杉戸農業・北本・浦和西・浦和一女・南稜・市立浦和・花咲徳栄・浦和実業学園・所沢・昌平・狭山ヶ丘	27	
	千葉	成田北・成田国際・八千代松蔭・市立松戸・千葉・流山おおたかの森・幕張総合・中央学院・柏の葉	9	
	東京	東京成徳大学・成城学園・吉祥女子・共立第二・日本大学櫻丘・第五商業・江戸川女子・松原・ICU・品川エトワール・村田女子・神田女学園・十文字・晴海総合・文京学院大学女子・戸山・国際・飛鳥・大妻多摩・八王子・東京学芸大学附属・上水・若葉総合・野津田・砂川・大泉桜・杉並総合・芦花・恵泉女学園・修徳・成立学園・青梅総合・狛江・大泉・東久留米総合・板橋有徳	36	
	神奈川	慶応湘南藤沢・法政大学女子・市立川崎・横浜国際女学院翠陵・多摩・伊勢原・弥栄西・橘女子・海老名・大清水・湘南学院・外語短大付属・愛川・神奈川総合・相模原総合・津久井・秦野曽屋・麻生総合・有馬・大和	20	
	山梨	市立甲府商業・増穂商業・富士北稜・日本航空	4	
北信越	新潟	柏崎総合・国際情報・高志	2	4
	富山	呉羽・高岡商業	2	
東海	静岡	静岡大成・沼津西・桐陽・吉原・磐田東・磐田北・藤枝西・常葉学園橘・藤枝順心・榛原・吉田・清水国際・清水南・東海大学付属翔洋・聖隷クリストファー	15	28
	愛知	春日井商業・岩倉総合・小坂井・松蔭・旭丘・時習館・名古屋経済大学市邨・相山女学園・愛知啓成・聖カピタニオ女子	10	
	三重	津西・四日市南・四日市西	3	
関西	滋賀	八幡商業・石部・日野	3	16
	京都	京都橘・京都聖母学院	2	
	大阪	大阪桐蔭・大商学園・茨木西・堺女子・柴島	5	
	兵庫	啓明女学院・神戸学院大学附属・播磨南・北摂三田・三田西陵・日本学園	6	
中国	鳥取	鳥取東・鳥取西・米子	3	14
	岡山	総社・芳泉・総社南・作陽・備前緑陽	5	
	広島	廿日市・広島皆実・市立沼田・祇園北・山陽女学園・広島文教女子大学附属	6	
四国	徳島	城東・徳島商業・城北・鳴門・徳島市立・徳島北	6	12
	愛媛	南宇和・新居浜商業・小松・宇和島南・済美・松山東雲	6	
九州	佐賀	神埼	1	24
	鹿児島	鹿児島女子・鳳凰・神村学園・鹿屋女子・鹿児島西	5	
	沖縄	名護・浦添・那覇国際・陽明・首里東・浦添商業・豊見城南・名護商工小禄・那覇商業・開那・西原・読谷・那覇・那覇西・糸満・豊見城・首理	18	

全国の高校女子サッカーを盛り上げようという試みは、2002 年頃から関東地区で始まった。目標はインターハイの実現である。女子サッカー競技は各都道府県の高等学校体育連盟には加盟してきたが、全国高体連には加盟していなかった。インターハイを実現するには全国高体連に加盟しなければならない。関東地区の高校のサッカー部顧問が中心となって、関東高校女子サッカー専門部という組織を新たに立ち上げ、関東 1 都 7 県が全国高等学校体育連盟に加盟した。現在では、この専門部が中心となり、関東高校女子サッカー大会の開催などを通して、高体連サッカー専門部女子部の加盟校数を増やすよう働きかけをしている。

さらに、地域の大会運営などの地道な運動と共に、全国高体連加盟を J F A に働きかけ 2008 年に全国高体連に正式加盟する運びとなった。全日本女子サッカー高等学校選手権と全日本女子サッカーユース選手権という、全国につながる高校年代の大会はすでに開催されており、歴史を積み重ねている。しかし高校総体は開催されてこなかったわけだが、関東大会から全国につながるインターハイが開催されるメリットは大きい。公式戦が増え真剣勝負をする機会が与えられることにより、女子サッカーの発展、強化につながることを期待される。

1.2.5. 大学女子サッカー

2008 年 12 月現在、全日本大学女子サッカー連盟には 64 大学と 1,261 名の選手が JFA に選手登録している。数年前までは大学サッカーの登録選手は、大学からサッカーを始めた選手も多く所属し、レベルの高いものではなかった。しかし最近は加盟数の増加、ユニバーシアードでの活躍を背景に高校各チームのトップレベルの選手が大学でのプレーを選択するようになり、大学サッカーのレベルも向上した。

日本における大学女子サッカーの主な大会としてはまず、最も権威のある大会の全日本大学女子サッカー選手権大会がある。大会成績を示したのが表 3 である。この大会は、大学のチャンピオンシップを決めるもので、地域とプレーオフを勝ち抜いた 16 チームが予選リーグの後、決勝トーナメントで優勝を争う。

その他に毎年 8 月、「全国大学女子サッカーつくばフェスティバル」が 30 チーム以上の参加により開催されている。また、2001 ユニバーシアード北京大会の強化を狙いとして始まった地域対抗戦などが行われている。この地域対抗戦は東西対抗戦から発展し、大学女子サッカー強化の役割も担っている。

過去に行われたユニバーシアード競技大会の成績をみると、準優勝 1 回、第 3 位 1 回の活躍を見せており、日本大学サッカーは十分世界チャンピオンを狙える位置に付けているレベルにあるといえる。

表 3 全日本大学女子サッカー選手権大会成績

	優勝	準優勝	3位	3位
第1回1992年	日本体育大学	大阪体育大学	東京女子体育大学	神戸女子大学
第2回1993年	日本体育大学	日本女子体育大学	大阪体育大学	姫路学院女子短期大学
第3回1994年	大阪体育大学	日本体育大学	大阪体育大学	福岡大学
第4回1995年	日本体育大学	日本女子体育大学	大阪体育大学	大阪体育大学
第5回1996年	日本体育大学	日本女子体育大学	姫路学院女子短期大学	
第6回1997年	日本体育大学	東京女子体育大学	日本女子体育大学	大阪体育大学
第7回1998年	日本体育大学	武蔵丘短期大学	東京女子体育大学	日本女子体育大学
第8回1999年	大阪体育大学	日本女子体育大学	日本体育大学	武庫川女子大学
第9回2000年	日本体育大学	東京女子体育大学	大阪体育大学	大阪教育大学
第10回2001年	日本体育大学	日本女子体育大学	東京女子体育大学	大阪体育大学
第11回2002年	日本体育大学	東京女子体育大学	大阪体育大学	武蔵丘短期大学
第12回2003年	日本体育大学	東京女子体育大学	大阪体育大学	早稲田大学
第13回2004年	日本体育大学	武蔵丘短期大学	大阪体育大学	神奈川大学
第14回2005年	早稲田大学	東京女子体育大学	大阪体育大学	神奈川大学
第15回2006年	大阪体育大学	日本体育大学	神奈川大学	早稲田大学
第16回2007年	日本体育大学	大阪体育大学	武蔵丘短期大学	早稲田大学

1.3. アメリカにおける女子サッカー

現在、世界の女子サッカーをリードしているのはアメリカである。アメリカ女子サッカーの発展の過程と、その成功要因の一つであろうカレッジサッカーについて述べていく。

1.3.1. アメリカ女子サッカーの勝利と市場

アメリカにおけるサッカーは男子代表より女子のほうが好成績を挙げている。ミア・ハムなどベテランスター選手が引退し世代交代の危機が危惧されていたものの、2008年北京オリンピックでは金メダルを獲得した。オリンピックの他に、女子ワールドカップ、CONCACAF 女子ゴールデンカップの大会成績をまとめると以下の表4のとおりである。オリンピック、ワールドカップともにそれぞれ2度優勝を果たしている。

続いてアメリカの世界ランキングを見ると、2008年現在第1位であり、近年はドイツとランキング1位を争っている。ランキングはFIFAが初めて公認した女子代表の国際試合（1971年4月17日・フランス対オランダ戦）以降の全試合を集計の対象としている。男子が直近4年間のみを対象としているのに対して、女子の場合、直近の成績が反映されにくいという点はあるものの、アメリカ女子サッカーは世界でもトップレベルにあり、大きな実績を残していることがうかがえる。このアメリカの勝利が、世界の女子サッカーをリードしていると言われる一つの要素となっている。

表 4 アメリカ代表チーム戦績

FIFA女子ワールドカップ			オリンピック			CONCACAF女子ゴールドカップ		
開催年度	開催国	アメリカの成績	開催年度	開催国	アメリカの成績	開催年度	開催国	アメリカの成績
1991	中国	優勝	1996	アトランタ	優勝	2000	アメリカ	優勝
1995	スウェーデン	3位	2000	シドニー	準優勝	2002	アメリカ・カナダ	優勝
1999	アメリカ	優勝	2004	アテネ	優勝	2006	アメリカ	優勝
2003	アメリカ	3位	2008	北京	優勝			
2007	中国	3位						

小林美由紀の文献²⁾によると、女子スポーツはマイナースポーツであるという認識を破った女子サッカーの国際大会がある。今から約10年前に行われたFIFA女子ワールドカップUSA1999である。参加16ヶ国、予選参加国81で開催されたこの大会は、開会式から入場者数がスタジアムの記録を塗り替え、開催国アメリカの優勝で大盛況のうちに幕を閉じた。決勝戦はアメリカと中国で争われ、会場のロサンジェルス・ローズボールは満員の90,185人の観客が詰めかけた。視聴率は13.3%を記録し100万世帯が視聴したとされる。PKで決勝ゴールを決めブラウン管の前で派手なパフォーマンスをしたアメリカ・チームのブランディ・チャステインは、アメリカ女子サッカーの有名選手ミア・ハムよりテレビ出演が多くなり、ナイキ社と1億円のスポンサー契約を結ぶなど、それまでの女子アスリートでは過去に例のない注目を浴びることになる。大会会場は地元アメリカ以外のゲームでも満員に近い観客(表5:出典小林)で埋まり、大会観客数延べ約65万人を記録。1試合平均入場者数37,536人、アメリカ代表戦に限っては、約62,000人の観客を集めた。大会入場料収入は約30億円、テレビ視聴者は約10億人に達し、まさにこれまでの女子スポーツの常識を打ち破るものであった。

表 5 アメリカワールドカップ試合会場別入場者平均

会 場	地 区	場 所	平均入場者数	収 容 力	WWC99 試合数
ジャイアンツスタジアム	東部	ニューヨーク	54,162	77,716	開会式+4
ローズ・ボール	西部	ロサンジェルス	53,643	92,542	決勝・3決+2
フォクスボロ・スタジアム	東部	ボストン	24,781	58,868	5
ソルジャー・フィールド	北東部	シカゴ	49,668	65,080	4
シビック・スタジアム	北西部	オレゴン州 ポートランド	18,899	27,396	4
スタンフォード・スタジアム	東部	カリフォルニア州 サンフランシスコ	73,123	85,429	1
スパルタン・スタジアム	東部	カリフォルニア州 サンノゼ	22,355	26,000	4
ジャンク・セント・クック・スタジアム	東部	ワシントンDC	31,066	80,116	6

アメリカ代表は1996年のアトランタオリンピックで金メダルを獲得した後、先述のように1999年のFIFA女子ワールドカップアメリカ大会優勝をおさめた。代表チームの勝利により、アメリカ国内での女子サッカー人気が高まりを見せ、国内での女子サッカーのプロリーグ創設が提唱された。その点で述べると、FIFA女子ワールドカップUSA1999の成功は、アメリカ女子サッカーのターニングポイントであろう。

以下は東明有美³⁾らの研究論文にあるWUSAについての記述である。アメリカでは、1999年以前から女子のプロリーグを作ろうという動きはあったものの、資本を出すスポンサーが見つからず、具体的な話になる前に立ち消えていた。しかし、1999女子ワールドカップが予想以上の成功をおさめ、女子サッカーが興行的にも成り立つものであることを企業に証明することができ、2000年3月にケーブルTVネットワークのディスカバリー・チャンネルと個人投資家が4000万ドル(約45億円)を出資し、プロ化実現に向けて大きく前進していく。その資金4000万ドルを平等に8等分し、1チームあたり500万ドルを各チーム今後4年間の運営資金にあてた。スポンサーはゲーターレードとJohnson& Johnsonの2社がつき、2001年にWUSA(正式名・世界プレミア女子サッカーリーグ)が発足した。

各チームのホームタウンは地理的条件、施設などを考慮して、全米で8つの都市が選ばれた。その条件となる要素は、その地域のWUSAに対する熱意、スタジアムの適正、リーグ戦のスケジュールの調整、スポンサーの将来性や地元オーナーの興味、宣伝活動の協力などが挙げられる。

チームの選手選抜は全てドラフトで決まった。トップのアメリカ人選手24名(1チームあたり3人)をまず決めた後、外国人枠のトップ16名(1チームあたり2人)をドラフトで割り振る仕組みである。そしてトップ16名以外の外国人のドラフトは198名がトライアウトとドラフトを兼ねた試合形式のテストマッチを経て入団した。トップ24名のアメリカ人選手は「Founding Players;基となる選手」と呼ばれ、家庭等の事情を考慮して3都市まで希望を出せるという例外措置があったが、日本人をはじめ外国人が希望を言えるシステムではなかった。外国人は2人1組でドラフトにかけられる。しかしWUSAは、開始の時点でUSLに参加しなかったことや経営陣のマネジメントの失敗、代表チームの世代交代がスムーズに進まなかったこと、ミア・ハムなどのスター選手がその後誕生しなかったなどの原因で、人気が興収に結びつかず、2003年9月にリーグ休止となった。

2009年の春をめどにアメリカのプロリーグが復活すると先般発表になった。名称はWUSAではなく、WPS(Women's Professional Soccer)という名でスタートする。選手の平均年俸30000-40000\$といわれ、日本からは日テレ・ベレーザの澤穂希選手などがドラフトで指名された。WUSAが開幕する前から、アメリカのクラブサッカーにはW-Leagueというセミプロリーグが存在する。WPSがはじまっても、W-Leagueは、そのままの形で残りW-Leagueのチームでプロリーグに参加するチームもある。現在、世界

的な金融不安に見舞われ開幕の危機の声が聞こえる中、WPS の今後の動向が注目される。

このように、ワールドカップの盛況ぶりや国内で女子のプロリーグ構想をみると、アメリカでは女子サッカーの市場が発展していることがうかがえる。

1.3.2. アメリカ女子サッカーの普及

アメリカの女子サッカー人口は世界一と言われ、推定で 1,000 万人以上である。ただしこの競技人口とは、大人と子供(6 才以上)を対象に合わせて 15,000 人を対象に、年に 2 度以上参加した競技を下に統計的に算出したものであり、女子サッカーの競技人口を正確に定義し調査したものとはいえない。体育の授業や楽しむ程度の競技経験でもサッカー人口に入るが、いずれにしても女子サッカーが国民に認知されていることが伺われる。登録人数のランキング¹⁾をみても、アメリカは群を抜いてその登録数が多いのが分かる。(表 6)

表 6 女性登録数ランキング

女性協会登録人数ランキング(単位:千人)		
1	アメリカ	1670
2	ドイツ	871
3	カナダ	495
4	スウェーデン	136
5	オーストラリア	112
6	ノルウェー	98
7	イングランド	97
8	オランダ	84
9	デンマーク	56
10	フランス	49

USA 競技別スポーツ参加人口調査によると、アメリカサッカー協会登録数¹⁾の 40 パーセント以上は女性の登録である。一方、指導者の男女比率もほぼ同数である。日本の女子サッカー登録数が全体に占める割合は 3%程度であることと比較(図 2)すると、その差が非常に大きいことが見てとれる。

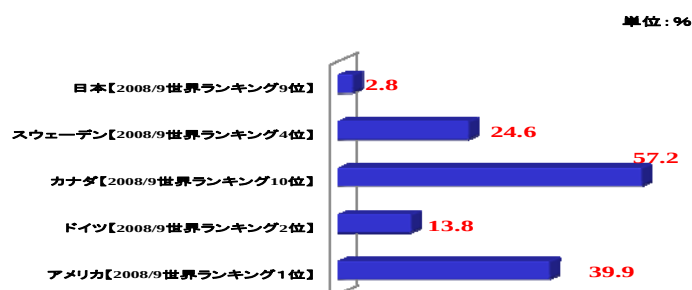


図 2 各国の登録人数に占める女子の割合

東明有美らの研究論文³⁾によれば、1960年代以前は女子が競技スポーツをする時代ではなく、女子サッカーが普及していくための社会的下地はなかった。その後ウーマン・リブ運動がアメリカを中心として起こり、社会の女性進出が目立つようになった。そして大学スポーツをはじめ、スポーツの世界でも1970年を境として、女性の参加が急激に増加していき、1972年「TitleIX」が施行される。通称「TitleIX」とは「Title IX of Education Amendments of 1972 (1972年教育修正法9編)」のことであり、その前文には「合衆国に住むいかなる人も、単に性が違うという理由のみで政府から財政的援助を受けている教育プログラムや活動で参加を拒否されたり利益を否定されたりあるいは差別にさらされたりすることはない」と唱われている。「TitleIX」は、教育全般にかかわる規定である。特に男女差が問題となったのは、スポーツの分野であった。

小林によると、「TitleIX」は男女平等を促進しただけでなく、その具体的な予算配分にまで影響を及ぼしている。例えば、在学男女の比率と同じだけクラブ数とクラブの予算を取らなければならない。これには法的拘束力もあり、訴訟社会のアメリカでは、これが守られていない学校はたちまち裁判沙汰となるケースが多いという。大学が女性スポーツにあてた予算の統計としては、1972以前は2%に満たないものであったが、1991年には約30%にまでふくらみ、現在では40%以上と推測される。一般にサッカーといえば、アメリカにおいては4大プロスポーツほどの人気はなく、まだメジャースポーツとは呼べない。その中にあって女子サッカーは、女性に人気のスポーツである。数多くのスポーツ愛好家が存在するなか、「サッカーママ」という言葉がアメリカには存在するように、女の子を持つ親はサッカーを嗜ませたいと希望しているケースが多くある。

現在アメリカ在住でマントホリヨーク大学の監督を務める羽石架苗氏にメール調査(2008/07/09)したところ、アメリカ国内ではアメリカ代表の勝ち負けに関わらず女子サッカーの人気は高く、セミプロであるW-Leagueでも平均で300-400人の観客を毎試合集めるチームが多いという。大学レベルの試合でも、日本の「なでしこリーグ」以上に観客を集める試合が多く、盛り上がりを見せている。若い少女たちが地元の高校生の試合も見に行くなど女子サッカーが若い世代に文化として根付いている。ではその要因は何であろうか。

アメリカは学校対抗のスポーツが盛んである。特に大学スポーツは、アメリカ4大プロスポーツの規模に匹敵する規模で運営されている。ちなみに2001年の統計⁴⁾によると、4大プロリーグ収入は約1兆4300億円。大学スポーツ収入は約1兆2130億円である。各大学でスポーツクラブが存在し共学の学校が多く存在する場合には、「TitleIX」の法的拘束力もあり男子と同じ割合のクラブ数をつくらなければならない義務が大学に生じる。同時に予算配分もそれに応じることから、資金的に男子並みであり、優秀なコーチを雇うこともできる。ほとんどの学校にも女子サッカークラブ

が存在し、女子サッカー愛好者が多く女子サッカー人口、登録者数共に多い一因がここにある。

羽石架苗氏へのメールヒアリングによると（2008/11/12）「TitleIX」が法律となつてから、アメリカの多くの大学が女子サッカーチームを創設した。男子サイドでは、アメリカンフットボール、野球、バスケットボールが人気であるが、バスケットボール以外では女子種目がなく、多くの場合サッカーが選ばれた。また、女子サッカーはアメリカの中流階級以上特に白人社会の少女たちに人気がある。女子サッカーのスタープレイヤーはほとんどが白人であり、少女たちの憧れでもある。そして、サッカーというスポーツ自体が、ユースの時点でお金がかかると言われ、選抜チームや地域代表チームに入ってからより質の高い対戦相手との試合を組むなどして指導を受けるために、少女たちは幼い頃から高いお金を払ってクラブチームに所属したいと願う現実がある。その際、用具やユニフォームなどを購入するので経済的負担は大きいものと思われ、実際にいくつかのチームを掛け持ちしている少女もおり、毎週末試合がある場合は、試合の送り迎えも親がするために、女子サッカーはかなりお金のかかるスポーツとして認識されている。よって女子サッカーは中流家庭以上のスポーツというイメージがある原因でもある。そして経済的にある程度裕福である白人の女子に人気のスポーツであること。ミア・ハムのようなロールモデルとなるスターが存在すること。そうした背景の中、大学で奨学金をもらってサッカーができることが女子サッカー人口の多い理由でもあるといえる。

1.3.3. アメリカのカレッジサッカー

アメリカの大学の選手達のプレー環境は世界の中でみてもかなり充実している。また、アメリカの大学では、専門のコーチとスタッフが揃い、芝生のグラウンドなど恵まれた環境の中サッカーをすることができる。そうしたことから、プロを目指す優秀な選手でも、大学を卒業してからというのがアメリカでは一般的である。また、外国からも代表クラスのアスリートが留学に訪れるという現状がある。

高校のほとんどのチームには女子サッカーチームがあるのもカレッジサッカーが盛んな理由の内の一つとなっている。アメリカのクラブ活動はシーズン制を取っており、アメリカ高校女子サッカーの場合 9 月から 12 月が学校でプレーし、残りの期間は地域のクラブチームに所属してプレーするのが一般的である。多くの大学ではスポーツ成績と学業が共に優秀な生徒に対して奨学金制度を設けており、高校生や親たちはそれを目指にしているという一面もある。

1.3.4. NCAA

アメリカカレッジサッカーの上部団体であるNCAAは、1906年に(Intercollegiate

Athletic Association of the United States) として創設され、1910 年に現在の名称になった。N C A A は試合における競技規則の管理などを主な業務としていたが、当初は陸上競技大会を主催した。その後、次第に開催される種目が増加し、ボランティアとして組織の運営では対応することができず、専門のスタッフが必要となる大きな組織へと進化していく。また 1999 年には N C A A の大会放映権に関し 11 年間 60 億ドル以上の契約を結ぶなど、資金面での発展も遂げていく。

N C A A の目的は、大学競技スポーツをフェアに、公平・安全そしてスポーツ人らしいマナーとモラルに沿って統括することである。そして学生アスリートの教育的経験を重要課題として、カレッジスポーツを高等教育と調和させることを狙いとしている。N C A A 自体は主に大学のスポーツクラブ間の連絡調整、管理など、さまざまな運営支援などを行う。⁵⁾ 大学の体育協会としては世界でも最大規模で、1999 年から初のテレビ放映権の契約を結び、一部の競技ではリーグ戦がテレビ中継されるなど人気が高いものとなっている。現在、アメリカンフットボールやバスケットボールなど 23 の競技で 88 の大会を運営しており、加盟する団体数は大学やカンファレンス (Conference)、その他の関連組織を含め合計、1,280 以上が属し、360,000 人以上の学生アスリートのサポートをしている。カンファレンスとは、いくつかのスポーツチームで構成されるリーグのことである。アメリカのカレッジスポーツにおけるカンファレンスは、日本では言えば関東女子サッカーリーグ、東都大学野球リーグ、関西学生アメリカンフットボールリーグなどとはほぼ同じ意味を持つ。カンファレンスやその構成する大学を統括する組織として存在するのが、N C A A である。

ブリッジ HP⁶⁾ によると、もう一つの組織として、N A I A (National Association of Intercollegiate Athletic) があり、こちらもカレッジサッカーリーグを統括運営している。N A I A は、N C A A とくらべて小規模な大学がその基本方針に基づいて加盟しており Athletic Program が小さいのが特徴である。また N C A A が定めたテスト (TOEFL) などの点数が足りない選手が、まず始めに一年間 N A I A の大学でプレーした後に N C A A の大学に編入するという形がよくとられている。しかし、カレッジサッカーの主流はやはり N C A A が統括運営するリーグである。

1.3.5. カレッジスポーツ型好循環

アメリカンフットボールやバスケットボールをはじめとしたカレッジスポーツでは、毎試合多くの観客を集めるだけでなく、テレビ放映されスポンサーが付く場合が多い。アメリカのカレッジスポーツの年間収入規模は 4 大プロリーグ並に大きい。プロスポーツでは、その収入からの利益を選手の年棒などにあてるが、カレッジスポーツでは選手に年俸を支払う必要はなく、優秀な選手には授業料免除や、特待生の資金、奨学金などの交付といった特典が与えられる。実際に多くの選手たちは奨学金をもらっ

でプレーしている。収入全体からみた場合、プロリーグの運営に比べてかかる経費は少なく、設備や施設の充実をはかり、結果として学生に還元し、大学全体の豊かな環境づくりに貢献する仕組みが確立されていると言える。⁴⁾

アメリカの大学女子サッカーは、アメリカンフットボールやバスケットボールほどではないものの、多くの選手には奨学金が支給され、また多くの支給品を受けてプレーしている。

プロスポーツの世界では、個々のチームの競技や経営強化だけではスポーツ文化を発展させるという課題に完全に答えられない。競技全体・リーグレベルでの競技、経営強化が必要となる。この両者の関係が最適のときに、最高のスポーツビジネスが成功する。アメリカのカレッジサッカーの仕組みもこれに当てはまる。リーグで白熱した試合が多く行われ、それを応援する愛校心のある学生や地域住民がチケットを購入し、応援に駆けつける。その収益を大学のスタジアム建設や各クラブの専門コーチを雇う資金に充てる。またスポーツアスリートへの奨学金などにも間接的に運用される。つまり、スポーツ分野での勝利に結びつけるという好循環の仕組み（図3）が存在する。

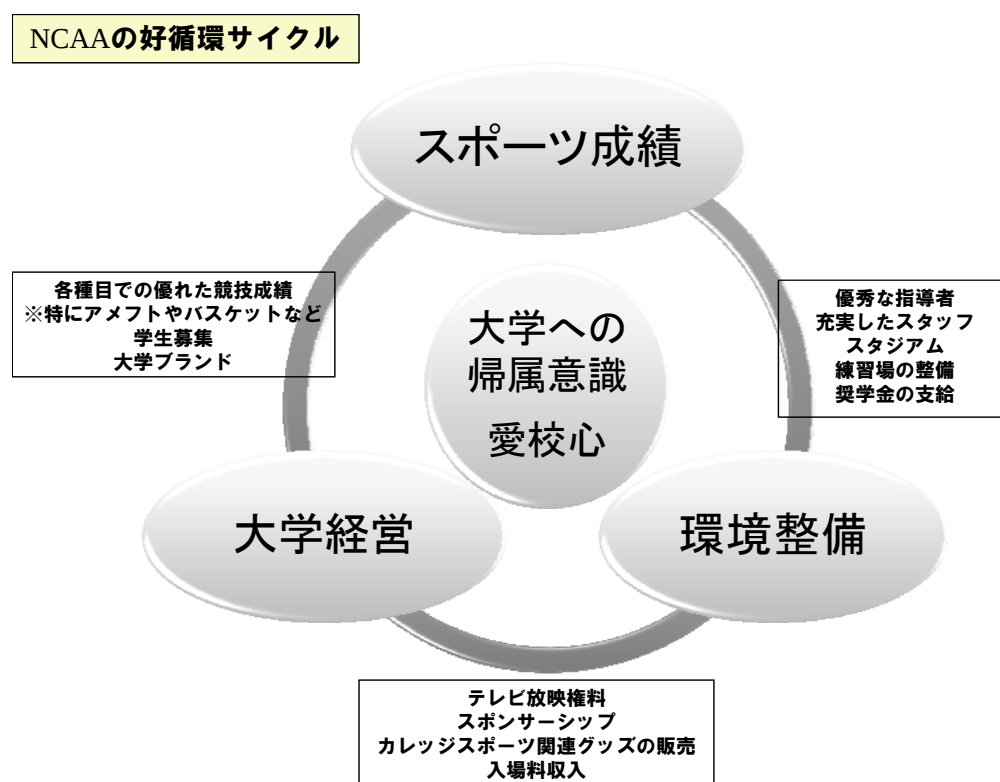


図3 NCAAの好循環サイクル

1.4. 問題意識

日本の代表チームの強化は順調に進んでいる。また、日本での女子サッカーの認知度も、先のオリンピックの大躍進で広まった。そこで日本女子サッカーのさらなる今後の発展を実現するにはどうすればよいのか。

先述してきたように、アメリカの女子サッカーをみた場合、勝利と普及面で世界の女子サッカー界をリードしているということが言えるであろう。アメリカの成功例のように、高校生を受け入れる側のカレッジサッカー（大学女子サッカー）の充実が重要であると考えられる。日本も大学サッカーの発展が鍵を握るのではないか。そして、日本の大学サッカーの現状が、ユース世代の高校生にどのように影響しているのだろうか。

筆者は、都内 J 高等学校に勤務し女子サッカー部の監督を務めている。ジュニア女子に向けては、サッカー地域活性化のための大会【J 学園杯女子ジュニアサッカー招待大会】を、埼玉県新座市において毎年開催している。児童の多くが中学進学と同時にサッカーを辞めて違う競技等を選択していく現実があり、中学年代のチーム不足が女子サッカーにとって大きな問題であるとの J F A の指摘を、実際に現場で感じてきた。

「女子サッカーの発展なくして日本サッカーの発展なし」との考えから、J F A は「女子サッカーの活性化」に積極的に取り組んできた。公式ホームページ上では女子チームの検索システムを構築して情報を一般に提供する⁷⁾など、この年代の女子チームの支援に力を入れるようになった。その後アトランタオリンピックベスト 8、北京オリンピックベスト 4 などの「なでしこジャパン」の活躍の効果もあり、その成果が現れ始めた。女子サッカーのメディア露出も追い風となって、現在、中学年代の受け皿となるチームが増加し、高校世代とともに競技人口は増加傾向にある。小学生年代と高校生年代の間である中学年代の競技人口・チーム数が少ない、いわゆる「くびれ現象」は、現在では改善されつつある。

では、高校生年代の女子サッカーの現状はどうか。日本女子代表レベルにおいて、女子サッカーはめざましい発展を遂げていることは先にも述べた。また、いわゆる「くびれ現象」も改善に向かっているものの、ユース年代においてはいくつかの問題を抱えている。

J 高等学校サッカー部では、夏の全日本高等学校女子サッカー選手権大会終了と同時にサッカーを辞めてしまう選手が大半を占める。多くの生徒達はできるならば大学進学後もサッカーを続けたいとの希望があるにもかかわらず、ごく一部のトップ選手を除く多数の生徒が、高校卒業後にサッカーから離れていく。これはユース年代の高校女子サッカー全体の傾向であり、女子サッカーの普及、強化、育成の観点からも新たな問題といえるだろう。

このような現状を踏まえると、高校生の受け皿である大学女子サッカーが発展すること

で、大学に入ってからでも女子サッカーを継続する選手が増えると考えられる。

現在日本において、ユース年代や大学サッカーに関する先行研究は見あたらない。またアメリカ女子サッカーワールドカップに関する調査報告¹⁾や日米の女子サッカーの普及に関する研究²⁾はあるものの、ユース年代の普及の施策に主眼をおいた先行研究はない。女子サッカー選手の体格や体力、怪我などの運動科学の論文⁸⁾などはすでに発表されているが、バイオメカニクスや傷害対策の研究が大半で、大学女子サッカーリーグを分析した研究はいまだないといつてよい。

1.5. 研究の目的

そこで本研究では、大学女子サッカーにおける現状の問題点を明らかにするとともに、我が国における大学女子サッカーのさらなる発展策を探ることを目的とする。

第2章 分析方法

2.1. 分析する前に

分析に入る前に忘れてならないのは、大学は何よりも教育、研究の場であるということだ。大学スポーツは、単に勝利を追求するだけではなく人格形成の場となっていることに大きな存在意義がある。よって大学女子サッカーも、学生が人間として成長していく教育的な場であるべきだ。分析を進めていく上で入試難易度や競技力の高低に言及するが、それはあくまでも、サッカーを志す女子高校生が大学進学の際に直面する問題点を抽出するための指標であるにすぎない。ここにとりあげるすべての大学指導者並びに学生が、入学時の難易にかかわらず、時間的、精神的に100%の情熱を注ぎ入れ、競技力や学業だけでなく人間性向上のためにも活動していることはまぎれもない事実である。そのことを筆者は十分に認識し、かつ敬意をもって論ずることを、申し添えておく。

なお調査に当たっては、過去の論文や雑誌、新聞等の文献検索に加え、大学のホームページやアメリカカレッジスポーツ関連のWebサイト、筆者自身の経験、アメリカ女子サッカー有識者やなでしこリーグの現場チーム監督、予備校の講師へのヒアリングなど行い資料収集した。

2.2. 分析手法

大学女子サッカーでプレーするためには、大学に入学しなければならない。高校生が大学進学を目指す際、将来の進路や自らの興味に合わせて大学を選択する。そして、大学に入学するためには、種別を問わず入学試験などが存在する。そのため、高校生からの進学需要が高い大学は入学試験の難易度もおのずと高くなる。その観点から、本論文では、特に入試難易度と競技力という2つの観点にフォーカスして分析を進めるものとする。また、大学リーグの現状をより明らかにするためには、大学側からみた選手（学生）の主な供給源である高等学校の現状を明らかにする必要があると考えた。よって同様に高等学校の分析も行う。

手法としては、2008年度関東大学女子サッカーリーグ加盟大学に関して、競技成績をポイント化し偏差値に換算したものと、入試難易度を偏差値で数値化したものの2軸を使い、マトリクス図に4タイプ分類し分析を行う。分類は、第1象限を「文部両道型」、第2象限を「競技力重視型」、第3象限を「発展途上型」、第4象限を「学力重視型」

とする。高等学校も同様の手法で分析することとする。

2.3. 分析対象（大学）

2008 年 10 月現在、全日本大学女子サッカー連盟に加盟している大学は、全 64 チームである。そのうち関東大学女子サッカー連盟加入大学は 22 チームで、地域別で比較した場合一番高い割合を占める。また、現在大学女子サッカーで地域リーグを行っているのは、関東大学女子サッカーリーグと関西大学女子サッカーリーグの 2 地域のみである。

全日本大学女子サッカー選手権大会は 2007 年度までに過去 16 回開催されたが、歴代優勝校の優勝回数は、日本体育大学（関東）12 回、大阪体育大学（関西）4 回、早稲田大学（関東）1 回となっており、戦績の面からも関東大学女子サッカーリーグ加盟大学が最も実績を残している。^{7) 9)} 以上の理由から、大学女子サッカーの分析をするために関東女子サッカーリーグをサンプルとして抽出し、分析対象とした。

2.3.1. 競技成績のポイント化（大学）

2008 年度から過去 3 年間さかのぼり、関東大学女子サッカーリーグ順位をランキングする。そして 1 位 30 ポイントに定め、1 ポイント刻みでポイント化した。ただし 2008 年度の場合、ランキング 1 位 30 ポイントから 1 ポイント刻みでポイント化した上で、その素ポイントを 2 倍にして加算した。これはポイントを倍にすることで、現在のリーグでの実力を反映させるためである。

また、東京外語大学、千葉大学、尚美学園大学、関東学園大学、順天堂大学、東京情報大学は 2005 年度以降の加盟である。よって加盟以前のポイントを加算することができない。新規加盟チームの場合は現在Ⅲ部リーグからのスタートとなり、どんな高い競技力を持っていたとしてもⅠ部に昇格するためには 3 シーズンの歳月がかかる。新規加盟校に関しては、現在のリーグ戦順位が競技力を正確に表すことにはならないが、ポイントデータに欠損のある大学（2005 年度以降に加盟した 6 大学）については、加盟直後の成績がそれ以前にも同等であったと仮定して欠損年度のポイントを補うこととした。

なお、関東大学女子サッカーリーグは全日本大学女子サッカー選手権大会予選も兼ねている。リーグ戦で 1 位から 5 位に入賞した場合は、全日本大学女子サッカー選手権大会（通称インカレ）の出場資格を得る事ができる。2005-2007 シーズンの過去 3 年間、全日本大学女子サッカー選手権大会において 3 位までに入賞した場合にそれぞれ、優勝位（30 ポイント）、準優勝（20 ポイント）、3 位（10 ポイント）を加算した。

最後に、全 22 大学のポイントデータの平均値と標準偏差を算出する。そしてその数値から各大学のポイントデータの T スコア（偏差値）を算出し、その値を「競技力レベル」と定義した。

各大学の競技力は明確に数字で定義することはできない。本論文では、関東大学女子サッカーリーグと全日本大学女子サッカー選手権大会の競技成績（順位）をポイント化し、全 22 大学のデータの平均値と標準偏差を用いて T スコア（偏差値）を算出することで競技力レベルの代理変数とした。競技力算出方法をまとめたのが、表 7 である。

表 7 競技力のポイント化の方法

	指標	ポイント算定	競技力 高低の基準
競技力	関東大学女子サッカーリーグ(06-08)	T 部リーグ上位からランキングし 順位をランキング1位30ポイントに定め、1ポイント刻みでポイント化 2008年度の場合、ランキング1位30ポイントから1ポイント刻みでポイント化した上で、その素ポイントを2倍にして加算 ポイントデータに欠損のある大学(2005年度以降に加盟した6大学)については、加盟直後の成績がそれ以前にも同等であったと仮定して欠損年度のポイントを補う	各大学のポイントデータの平均値と標準偏差を出し、その数値から各大学のポイントデータの T スコア(偏差値)を算出 T スコア(偏差値)の50を競技力の高い・低い の基準とする
	全日本大学女子サッカー選手権大会(05-07)	優勝30ポイント/準優勝20ポイント/3位10ポイント	

2.3.2. 入試難易度（大学）

入試難易度を数値化するにあたっては、2007 年 5 月時点の河合塾入試難易予想ランキング¹⁰⁾を指標に選び、ランキングの下限値の偏差値を入試難易度と定めた。小数点第 2 位以下は四捨五入した。

国公立大学の場合は、大学入試センター試験ではなく 2 次試験（個別学力検査）における換算偏差値を指標に選んだ。また筑波大学のように 2 次試験で実技試験などを課す場合¹¹⁾がある。その際は筆者が勤める J 高等学校進路指導部や予備校講師に聞き取り調査をするなどし、J 高等学校の過去の入学実績資料をもとに私大の一般入試結果を照らし合わせ、数値化した。ランキングは M1 を最高に B F までに分けられる。B F とは合格率 50%となる偏差値帯が存在しないものであるが、可視化するために本論文では 35 と定めた。各大学に複数の学部・学科がある場合があるが、まず優先順位を定め以下のような観点で指標に選んだ。

- ・約半数の大学がスポーツ系の学部学科を持つことから、はじめにスポーツ、体育、健

康に関する学部・学科を指標に選ぶ。

・スポーツ系の学部や学科がない大学については河合塾予備校へヒアリングし、女子サッカー部にとって有効な入試制度（例えばスポーツの自己推薦制度がある、センター試験に競技歴が点数化されるなど）を制定しているなどの要因で、その大学の学部・学科を指標に選んだ。

入学試験には、AO入試、スポーツ推薦入試、センター試験、実技試験など様々な入試の形態、種別があり、一様に数値化し比較することは困難である。また各大学の入試難易度は明確に数字で定義することはできない。よって本論文では、一般入試の偏差値を主な基準とすることで条件の均一化をはかり、大手受験予備校である河合塾のデータを指標に定め数値化することで入試難易度の代理変数とした。

学力を数値化する場合の指標、ポイント算定、基準をまとめたものを表8 入試難易度のポイント化の方法に示す。

表 8 入試難易度のポイント化の方法

	指標	ポイント算定	入試難易度 高低の基準
入試難易度	2007.5現在の河合塾入試難易予想ランキング	合格の可能性80パーセントの偏差値帯の下限値	入試難易度の高低の基準を偏差値50に定義した。
		国公立大学の場合は、2次試験(個別学力検査)における換算偏差値	
		国公立2次試験で実技試験などを課す場合は、予備校講師のインタビューや過去の入学実績資料をもとに同レベルと思われる私大の一般入試結果を参考に筆者が作成	
		BFは合格率50%となる偏差値帯が存在しないもの。BF(倍率が低く偏差値帯の存在しないもの)の偏差値は35とした。	
		各大学に複数の学部学科がある場合、以下のような優先順位で採用した。 1.スポーツ、体育、健康に関する学部・学科を指標に選ぶ。 2.河合塾に聞き取り調査し、募集定員が多いなどの理由でその大学の最も代表的な学部・学科を指標に選ぶ。	

2.4. 高校の分析と手法

東京都女子サッカーリーグの主催は東京都女子サッカー連盟であり、共催として東京都高体連サッカー部女子がリーグを運営している。2008年度に28回目を迎えるこのリーグは、Ⅰ部10チーム、Ⅱ部10チーム、Ⅲ部14チームの計34チーム構成で行われている。¹²⁾チームは総て東京都高体連女子サッカー部に加盟しており、2008度の加盟校数は36チームになり年々増加傾向にある。試合は5月にリーグ戦をスタートし、12月中には順位を決定し、1月に入れ替え戦を行うスケジュールである。

関東各都県の高体連加盟数の合計は、2007 年 10 月時点で 124 チーム、東京都は 36 チームという内訳になっている。東京都の関東に占める割合は 29%と最も多い。以上の理由から東京都女子サッカーリーグ（高校の部）を関東大学女子サッカーリーグの選手の主な供給源と考え分析対象とした。

東京高体連サッカー部女子の分析では、関東大学女子サッカーリーグの分析で行った分析方法と同様の手順で、東京都女子サッカーリーグ高校の部加盟校を入試難易度と競技力の観点から分析を行う。現在高校リーグは 2008 シーズンの途中であることから、2007 年度女子サッカーリーグ加盟高校を分析対象とした。競技成績をポイント化したものと入試難易度を数値化したものを、大学と同様に 2 軸のマトリクス図にまとめ、「文部両道型」「競技力重視型」「発展途上型」「学力重視型」の 4 象限に分ける。

2.4.1. 競技成績のポイント化（高校）

東京都女子サッカーリーグ（高校の部）03 シーズンから 07 シーズンまでの 5 年間の順位をポイント化する。Ⅰ部リーグ上位からⅢ部リーグまで順にランキングし、1 位 30 ポイントから 1 ポイント刻みでポイント化した。

リーグ戦のみでは、実力のある新規加盟校がⅢ部リーグからスタートするため高ポイントを獲得できず、現在の実力を反映しきれない。また、高校選手権に出場する枠も限られているので、上位校のみにポイントが偏ってしまう。そこで、直近の公式戦である全日本女子ユース（U-18）サッカー選手権大会東京都予選（08）で決勝リーグ進出した 5 チームには、高校とクラブチームがチャンピオンシップを争うレベルの高い大会であることから 50 ポイントの高ポイントを与えることとした。

また、06 と 07 の 2 シーズンに全日本高等学校女子サッカー選手権大会に出場した場合 20 ポイントを加点し、関東予選に出場した場合は 10 ポイントを加点した。

最後に、全高校のポイントデータの平均値と標準偏差を算出する。そしてその数値から各大学のポイントデータの T スコア（偏差値）を算出し、その値を「競技力レベル」と定義した。

各高校の競技力は明確に数字で定義することはできない。競技順位をポイント化し、全高校のデータの平均値と標準偏差を用いて T スコア（偏差値）を算出することで競技力レベルの代理変数とした。競技力を数値化する場合の指標、ポイント算定、基準をまとめ以下に、表 9 高校競技力のポイント化の方法を示す。

表 9 高校競技力のポイント化の方法

	指標	ポイント算定	競技力 高低の基準
競技力	東京都女子サッカーリーグ高校の部(03-07)	I部リーグ上位からランキングし ランキング1位30ポイントから1ポイント刻みでポイント化した	偏差値50を、競技力校庭の基準とした
	全日本高等学校女子サッカー選手権大会(07-08)	出場20ポイント	
	全日本高等学校女子サッカー選手権大会関東予選(07-08)	出場10ポイント	
	全日本女子ユース(U-18)サッカー選手権大会東京都予選(08-09)	決勝リーグ進出の5チームに50ポイント 現在の実力を反映させるためポイント加算した。 調査期間中、最後公式戦でありレベルの高い大会である理由から高ポイントに設定した。	

2.4.2. 入試難易度のポイント化（高校）

入試難易度を数値化する場合の指標、ポイント算定、基準をまとめたものを表 10 高校入試難易度のポイント化の方法に示す。

表 10 高校入試難易度のポイント化の方法

	指標	ポイント算定	入試難易度 高低の基準
入試難易度	2008年度用 晶文社高校受験案内	合格の可能性80パーセントの偏差値	入試難易度の高低を偏差値55に定義した。 ※高校受験の偏差値は一般に標準偏差が2 こぶの分布を示す傾向があり、また、偏差値 の低い学校は一般に数値を切り上げて表 記する傾向にある。以上の理由から偏差値が 高めにでるのが一般的である。よって55を ボーダーとした。
		私立高校は普通クラスと選抜クラスなど異なるコースがある場合はその平均値 ただし10以上の差がある場合は普通クラスの数値	
		都立高校で一つの学科に2学科以上ある場合、レベルの一番高い学科の値を示した。	
		外部募集を行わない私立学校は、中学入試で同レベルの学校の偏差値と高校の進学実績か ら筆者が査定した。	

「2008 年度用晶文社高校受験案内」の資料をもとに合格の可能性 80 パーセントの偏差値を入試難易度とした。私立高校は普通クラスと選抜クラスなど異なるコースがある。その場合は両コースの平均値をとる。ただし 10 以上の差があるように極端な開きがあった場合は、普通クラスの数値を採用し、また都立の総合高校のように一つのコースに 2 学科以上ある場合などはレベルの一番高い学科の値を示す。

外部募集を行わない中高一貫私立学校については、まず中学入試での偏差値を調査し

た。そして同レベルの中高一貫の学校の偏差値とその高校の進学実績の2要素の数値から筆者が認定した。

入学試験には、推薦入試制度や面接試験、内申点など様々な入試の形態、種別や要素があり、一様に数値化し比較することは困難である。また各高校の入試難易度は明確に数字で定義することはできない。

本論文では、主に一般入試の偏差値を主な基準とすることで条件の均一化をはかり、「2008 年度用品文社高校受験案内」を指標に定め数値化することで、入試難易度の代理変数とした。

2.5. 定義に基づき4つの型に分類する

関東大学女子サッカーリーグ加盟校と東京都女子サッカーリーグ高校の部加盟校を4分類型に分類するにあたり以下の表11のように定義を定めた。

表 11 分類型の定義

4分類型の定義	
文部両道型	競技力、入試難易度高い
競技成績重視型	競技力高い、入試難易度低い
学力重視型	競技力低い、入試難易度高い
発展途上型	競技力低い、入試難易度低い

※本研究では、クラブ活動と学問の両立の観点から「文武両道」ではなく「文部両道」という語句を用いることとする。

そして競技力を縦軸に入試難易度を横軸にとり、各大学をマッピングし4象限に分類(図4)した。

関東大学女子サッカーリーグの入試難易度と競技力の高低の基準はそれぞれ偏差値50に定義した。

東京都女子サッカーリーグ高校の部の競技力(偏差値)の高低の基準は50に定めた。また学力のボーダーラインは偏差値55に設定し、入試難易度を高低の基準に定めた。その理由は、高校受験の偏差値は一般に標準偏差が2こぶの分布を示す傾向があり、偏差値の低い学校は数値を切り上げて表記する場合が普通であるからである。つまり偏差値は高めに出るのが一般的傾向であるといえる。よって本論文では偏差値55をボーダーとし、実情に近い設定とした。

そして高校生が大学進学後にサッカーを続けないという問題の原因を抽出するため、

それぞれの競技成績をポイント化し偏差値に換算したものと、入試難易度を偏差値に換算したものを、定義に基づきマトリクス図にマッピングし、4つの型に分類した。

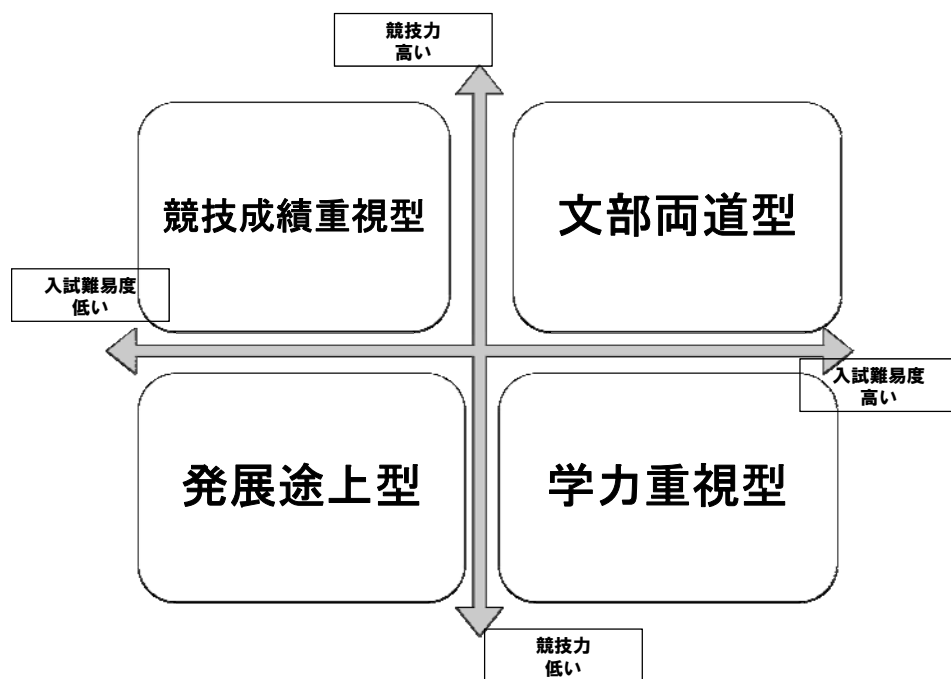


図 4 分類マトリクス図

第3章 結果

3. 1.

2008 年度関東女子サッカーリーグに加盟している大学の競技力ポイントを最終的にまとめると、以下の表 12 関東大学女子サッカーリーグ加盟校の競技力ポイント一覧になる。

表 12 関東大学女子サッカーリーグ加盟校の競技力ポイント一覧

大学名	競技力 (偏差値)	リーグP + インカレ P	関東大学女子サッカーリーグ										全日本大学女子サッカー選手権大会							
			2008			2007			2006			リーグP	2007		2006		2005		インカレ	
			順位	インカレ	P	順位	インカレ	P	順位	インカレ	P		順位	P	順位	P	順位	P		
日本体育大学	72.8	169	1	○	60	2	○	29	1	○	30	119	1	30	2	20			50	
早稲田大学	72	166	2	○	58	1	○	30	3	○	28	116	3	10	3	10	1	30	50	
神奈川大学	62.2	130	4	○	54	4	○	27	2	○	29	110			3	10	3	10	20	
東京女子体育大学	60.5	124	5	○	52	5	○	26	5	○	26	104					2	20	20	
武蔵丘短期大学	58.9	118	3	○	56	6	○	25	4	○	27	108	3	10					10	
関東学園大学	46.4	72	9		44	17		14	※		14	72								
筑波大学	54.8	103	6		50	3	○	28	6		25	103								
尚美学園大学	41.4	54	17		28	18		13	※		13	54								
日本女子体育大学	52.6	95	7		48	7		24	8		23	95								
大東文化大学	51	89	8		46	9		22	10		21	89								
東京学芸大学	49.9	85	12		38	8		23	7		24	85								
順天堂大学	40.9	52	18		26	※		13	※		13	52								
慶應義塾大学	49.9	85	10		42	10		21	9		22	85								
埼玉大学	47.4	76	13		36	11		20	11		20	76								
山梨大学	47.2	75	11		40	13		18	14		17	75								
茨城大学	45.5	69	15		32	12		19	13		18	69								
実践女子大学	44.7	66	16		30	14		17	12		19	66								
十文字学園女子大学	44.7	66	14		34	15		16	15		16	66								
創価女子短期大学	39.8	48	22		18	16		15	16		15	48								
東京情報大学	39.8	48	19		24	※		12	※		12	48								
千葉大学	39.3	46	20		22	19		12	※		12	46								
東京外国語大学	38.2	42	21		20	20		11	※		11	42								

・Pはポイントを表す。

・2005年度以降に加盟した6大学に関してはポイントデータに欠損のある年度(※)がある。その場合、加盟直後の成績がそれ以前にも同等であったと仮定して欠損年度のポイントを補った。

3.2. 関東大学女子サッカーリーグの入試難易度（偏差値）

2008 年度関東女子サッカーリーグに加盟している大学の学部や学科、数値化した入試難易度（偏差値）を最終的にまとめると、以下の表 13 になる。

表 13 関東女子サッカーリーグ加盟校の入試難易度

大 学 名	指標とした学部・学科など	ランキング	入試難易度ランキングに基づく 偏差値帯の下限值
慶應義塾大学	総合政策-総合政策	M	70
東京外国語大学	外国語-英語	0	67.5
早稲田大学	スポーツ科学-スポーツ医科	①	65
筑波大学	体育専門学群	①	65
千葉大学	教育-スポーツ科学課程	①	65
東京学芸大学	中等教育教員	①	65
埼玉大学	教養-教養	②	62.5
茨城大学	教育-学校教育-保健体育教育	③	60
山梨大学	教育人間科学-生涯学習-スポーツ健康	③	60
順天堂大学	スポーツ健康科学-スポーツ科学	⑤	55
実践女子大学	生活科学-食生活-管理栄養	⑥	52.5
日本体育大学	体育-体育	⑦	50
十文字学園女子大学	人間生活-食物栄養	⑦	50
神奈川大学	経済-経済前期A	⑧	47.5
日本女子体育大学	体育-運動-スポーツ科学A	⑧	47.5
大東文化大学	経済-社会経済3	⑩	42.5
尚美学園大学	芸術情報-情報表現A	⑪	40
関東学園大学	法-法律A	⑫	37.5
東京情報大学	総合情報-情報文化前	⑬	37.4
東京女子体育大学	体育-体育A	⑬	37.4
武蔵丘短期大学	健康スポーツ専攻	BF	35
創価女子短期大学	現代ビジネス学科	BF	35

3.3. 競技力と入試難易度の関係（大学）

定義にそって分類すると、以下のように4つの型に分類することができる。



図 5 大学の分類

3.4. 東京都女子サッカーリーグ高校の部の競技力（偏差値）

2007 年度東京都女子サッカーリーグ（高校の部）に加盟している高校のポイントを最終的にまとめると、以下の表 14 高校の競技力になる。

表 14 高校の競技力

	競技力 (偏差値)	最終ポイント	リーグポイント	2007		2008		2008	東京都女子サッカーリーグ(高校の部)					
				関東高校選手権	全国高校選手権	関東高校選手権	全国高校選手権	東京予選U-18		2007	2006	2005	2004	2003
十文字	76.9	260	150	10	20	10	20	50	1位	十文字	十文字	十文字	十文字	十文字
都立飛鳥	72.0	228	118	10	20	10	20	50	2位	都立飛鳥	都立飛鳥	東京成徳	東京成徳	東京成徳
村田女子	68.9	208	128	10	20			50	3位	文京学院	吉祥女子	都立飛鳥	村田女子	村田女子
修徳	55.4	121	71					50	4位	都立晴海	文京学院	村田女子	都立久留米	都立久留米
都立晴海	59.8	149	119			10	20		5位	修徳	修徳	文京学院	都立戸山	文京学院
文京学院	58.4	140	130	10					6位	東京成徳	都立晴海	都立久留米	吉祥女子	都立晴海
東京成徳	57.8	136	136						7位	吉祥女子	東京成徳	都立戸山	日大櫻丘	日大櫻丘
吉祥女子	55.7	123	123						8位	大妻多摩	村田女子	吉祥女子	文京学院	吉祥女子
成立学園	51.7	97	37			10		50	9位	村田女子	都立戸山	日大櫻丘	都立晴海	都立戸山
都立戸山	54.0	112	112						10位	共立第二	成城学園	都立国際	共立第二	共立第二
共立第二	52.0	99	99						11位	成立学園	大妻多摩	都立晴海	都立飛鳥	第五商業
大妻多摩	50.5	89	89						12位	第五商業	共立第二	修徳	都立国際	国際基督教
成城学園	50.0	86	86						13位	都立戸山	第五商業	成城学園	江戸川女子	都立国際
第五商業	49.1	80	80						14位	成城学園	都立松原	共立第二	大妻多摩	江戸川女子
日大櫻丘	50.5	89	89						15位	都立松原	八王子	八王子	都立松原	成城学園
都立国際	49.6	83	83						16位	国際基督教	国際基督教	江戸川女子	国際基督教	大妻多摩
都立松原	48.3	75	75						17位	江戸川女子	江戸川女子	大妻多摩	成城学園	都立大泉
江戸川女子	48.8	78	78						18位	八王子	都立国際	都立松原	都立大泉	都立松原
国際基督教	48.5	76	76						19位	都立国際	日大櫻丘	国際基督教	第五商業	都立飛鳥
八王子	45.2	55	55						20位	都立大泉桜	神田女学園	第五商業	神田女学園	文華女子
神田女学園	43.4	43	43						21位	都立野津田	成立学園	神田女学園	八王子	品川エトワール
都立芦花	40.4	24	24						22位	都立芦花	都立大泉桜	学芸大付属	学芸大付属	神田女学園
都立大泉桜	39.8	20	20						23位	都立杉並総合	都立野津田	都立芦花	文華女子	
学芸大付属	41.1	28	28						24位	日大櫻丘	都立芦花	成立学園	品川エトワール	
都立野津田	39.5	18	18						25位	恵泉女学園	学芸大付属	品川エトワール		
品川エトワール	40.6	25	25						26位	都立若葉総合	都立杉並総合			
都立杉並総合	38.7	13	13						27位	学芸大付属	恵泉女学園			
恵泉女学園	38.3	10	10						28位	都立青梅総合	都立若葉総合			
都立若葉総合	38.0	8	8						29位	神田女学園	都立上水			
都立青梅総合	37.2	3	3						30位	品川エトワール	品川エトワール			

3.5. 東京都女子サッカーリーグ高校の部の入試難易度（偏差値）

2007 年度東京都女子サッカーリーグ高校の部に加盟している高等学校の入試難易度（偏差値）を最終的にまとめると、以下の表 15 高校入試難易度になる。

表 15 高校入試難易度

	入試難易度
十文字	63
都立飛鳥	51
村田女子	43
修徳	49
都立晴海	57
文京学院	57
東京成徳	53
吉祥女子	72
成立学園	53
都立戸山	68
共立第二	56
大妻多摩	62
成城学園	64
第五商業	46
日大櫻丘	58
都立国際	67
都立松原	49
江戸川女子	68
国際基督教	71
八王子	59
神田女学園	40
都立芦花	51
都立大泉桜	49
学芸大付属	76
都立野津田	40
品川エトワール	39
都立杉並総合	50
恵泉女学園	61
都立若葉総合	48
都立青梅総合	54

3. 6. 競技力と入試難易度の関係（高校）

定義にそって分類すると、以下のように4つの型に分類することができる。

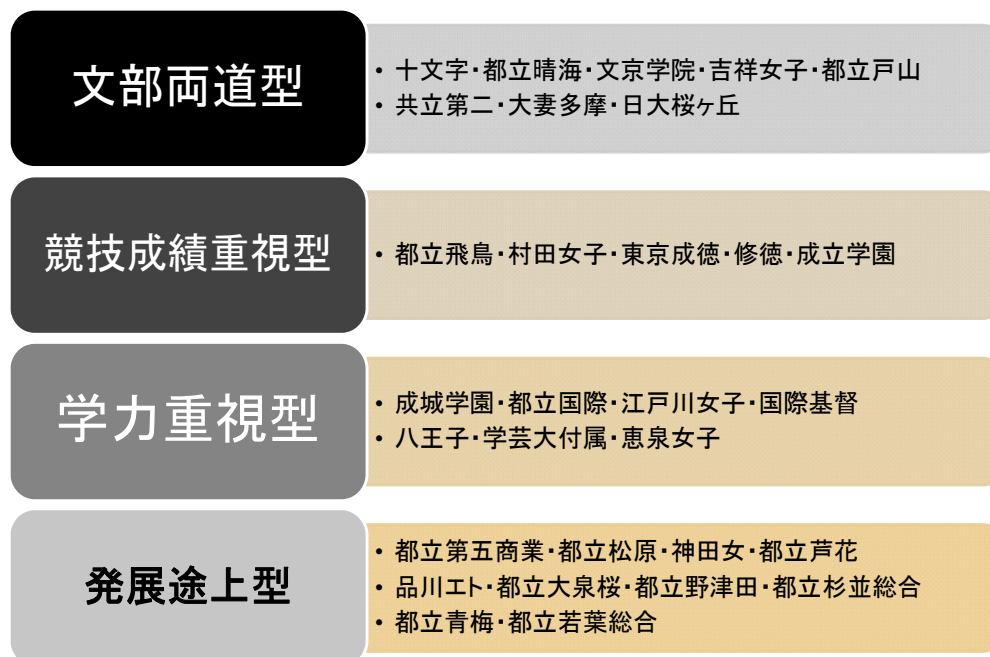


図 6 高校の分類

第4章 考 察

本研究はユース年代の高校生が継続的に女子サッカーを続けていくことのできる環境をつくるために、高校生が希望するにもかかわらず大学でサッカーを継続しない原因を究明することを目的としている。

以下に述べる考察では、分析の結果をもとに、高校生の受け入れ先を充実させるための解決策を模索し、大学リーグの加盟数を増加させ発展させていく必要性を指摘していく。

4.1. 大学分布と高校分布の特徴

4.1.1. 大学

まず、各大学の競技力（偏差値）と、入試難易度（偏差値）の位置を表すためにマトリックス図に大学名をプロットした。縦軸には競技力を横軸には入試難易度を表すようにした。

関東大学女子サッカーリーグ加盟校は私立大学と国立大学で構成されているが、関東女子サッカーリーグ加盟大学の国立大学と私立大学の分布状況を見るために、国立大学にマーキングして図7の中に表した。

また各大学は短期大学、総合大学、単科大学にわかれるが、スポーツ系の学部・学科を持つ大学、スポーツビジネスやスポーツマネジメント系のコースがある大学に注目しマーキングし図中に表し図7に示した。

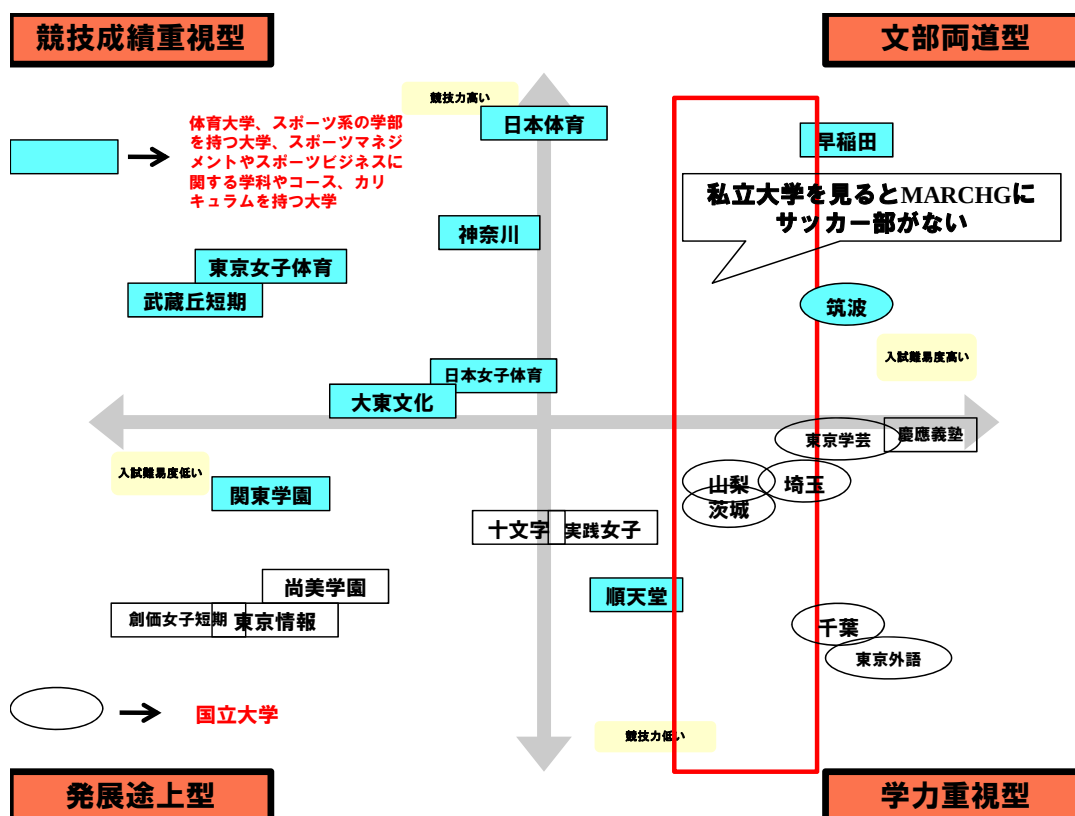


図 7 大学分布の特徴

上記図 7 から以下の 3 点の事が明らかになる。

- (1) 日本体育大学や東京女子体育大学などの体育大学と、早稲田大学などスポーツ系の学部・学科を持つ大学、およびカリキュラムにスポーツビジネス系の学科コースがある大学の分布状況を見ると、いずれも競技力（偏差値）が高い（近年新規加盟した関東学園大学と順天堂大学を除く）。その数は 22 大学中 10 大学あり、ほぼ半数を占めている。現時点で競技力（偏差値）50 に満たない大学についても、関東学園大学は来年度 1 部リーグに、同じく順天堂大学も II 部リーグにそれぞれ昇格し、競技力が伸びている。
- (2) 文部両道型に属する大学が他分類型と比べ少なく、早稲田大学と筑波大学の 2 校のみにとどまっている。
- (3) 入試難易度軸における偏差地帯 55-64 程度には、競技力の低い学力重視型の国立大学は分布しているが、私立大学が存在しない。

4.1.2. 高校

次に高校の分布状況を見ていく。競技力を縦軸にとり、入試難易度を横軸にとる。その後、各高校をマッピングし、4 象限を分類した結果が図 8 高校女子分類マトリクス図になる。

これを見ると東京都女子サッカーリーグ高校の部は、入試難易度（偏差値）軸、競技力（偏差値）軸の両方の観点から見た場合、大学がその分布状況に偏りがあることに比べて、均一に分布していることが分かる。

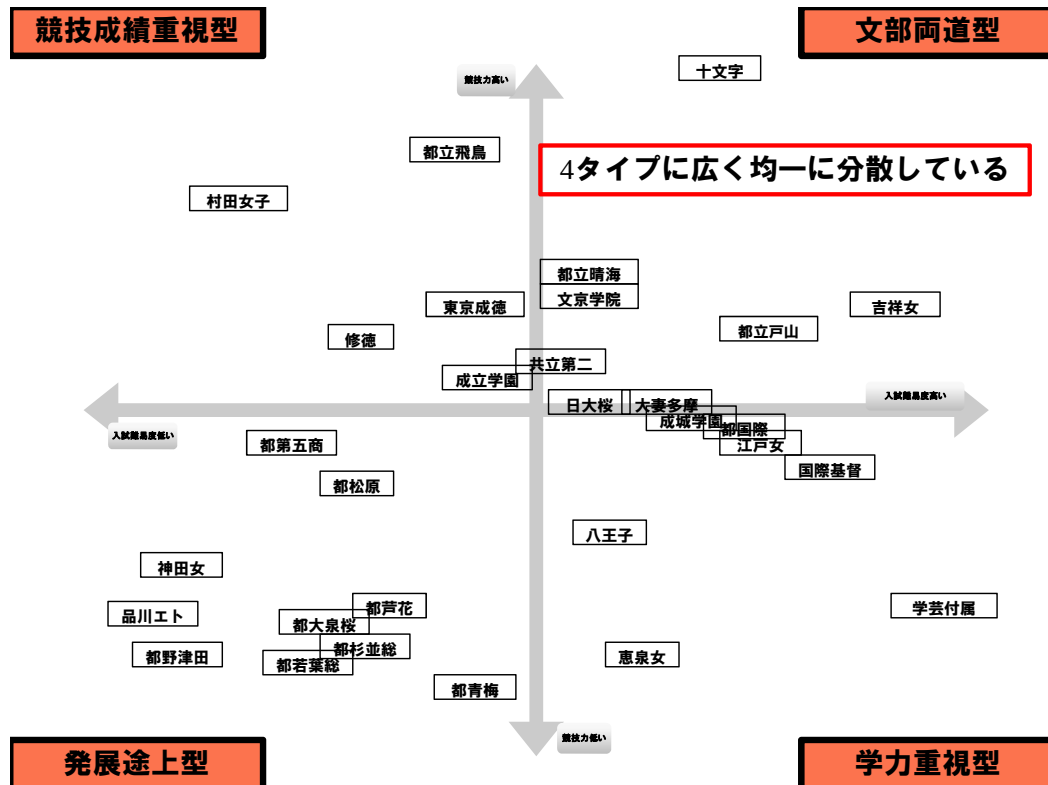


図 8 高校女子分類マトリクス図

4.2. MARCHG ゾーンにおける女子サッカー部創設の必要性

偏差値帯 55-64 程度の入試難易度群は、高校及び予備校の受験用語で「MARCHG」と呼び、明治大学・青山学院大学・立教大学・中央大学・法政大学・学習院大学などの人文系私立大学群を指す。その MARCHG ゾーンの私立大学に女子サッカー部が存在しないことが分析の結果明らかになった。MARCHG ゾーンの私立大学に女子サッカー部がないことは、大学で引き続きサッカーに関わっていきたいという高校生がサッカーを継続できない大きな障害となっているのではないだろうか。MARCHG ゾーンの私立大学に女子

サッカー部がないことについての原因究明と今後の見通しを高校の分布状況とあわせてさらに進めることとする。

4.2.1. サッカーを続けることができない原因

東京都内の高校女子サッカー部に所属する生徒の受験動向を見る。サンプルとして都内 J 高等学校サッカー部員の近年の受験大学を調査した。

ある年度の、J 高等学校サッカー部員受験大学を早慶上智国公立、MARCHG、日東駒専、その他の 4 つの偏差値帯別の割合を表したのが図 9 である。

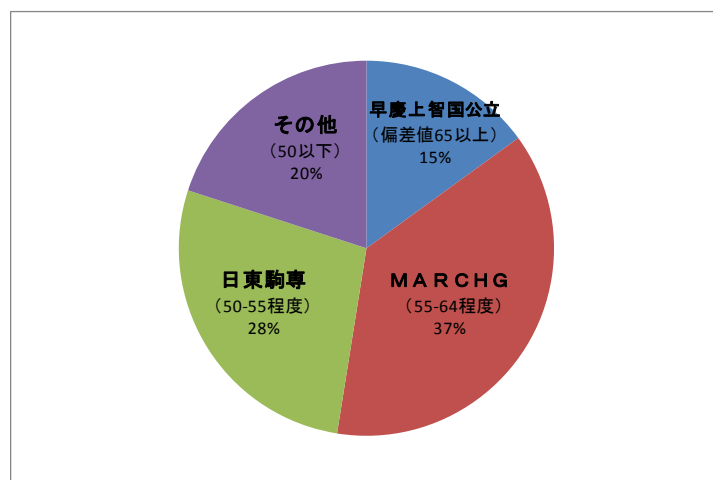


図 9 J 高校サッカー部の進学希望内訳

割合を調査すると MARCHG レベルの大学が 37%を占め、J 高等学校サッカー部における進学希望先のボリュームゾーンになっていることが分かる。つまり、J 高等学校サッカー部の「偏差値帯 55-64 程度の学力群を希望する受験生」は、競技力の低い国立大学を目指すか、女子サッカー部のない私立大学を目指すかのいずれかの選択を迫られることになると考えられる。

また、国立大学と私立大学の比率と系統別進路希望状況を見た場合、高等学校で高い競技実績を有する女子サッカー部員は、受験科目数が多いなどの理由から国立大学を第一希望とせず、私立大学を受験するケースが多い。「2008 年度用品文社高校受験案内」によると、その他の東京都高体連サッカー部全高校の 97%以上の生徒が私立大学へ進学している。

そして、文系か理系などの系統別進路状況を見ると、ある年の J 高等学校の希望進路系統別内訳は人文科学系 35%、教育・芸術・家政学系 20.2%、社会科学系 18.6%、理工学系 26.2%となつて、文系が約 74%を占める。

他校の状況はどうだろうか。東京都高体連サッカー部女子に加盟している高等学校の

ケースを調査するため、国公立進学者が多いいくつかの国立高校、私立高校、都立高校の私立大学合格者割合を見た。すると表 16 のようになり、ほとんどが私立大学に進学している現状が分かる。さらに、文系・理系の系統別進路希望について予備校関係者にヒアリングしたところ、J 高等学校以外の女子の受験生のケースも、女子が文系を多く希望する傾向は変わらないという。

女子高校生の多くは私立文系大学を希望しているといえる。

表 16 私立大学合格者割合

高校名	入試難易度	私立／公立	国立合格者(人)	私立合格者(人)	合格者全体に対する 私立合格者割合(%)
K女子高等学校	72	私立女子高校	17	413	96
都立T高等学校	68	都立高校	47	654	93
国立G高等学校	76	国立高校	81	638	89
都立K高等学校	67	都立高校	18	342	95

- ・2008年度用晶文社高校受験案内による
- ・国立大学は晶文社が選んだ主要9大学の06年度の合格者
- ・私立大学は晶文社が選んだ主要30大学の06年度の合格者

筆者は、毎年高等学校選手権を最後にして、多くの生徒が大学でサッカーを続けないことを問題だと感じてきた。J 高等学校は、毎年 95 パーセント超が大学へ進学する中堅進学校である。サッカー部は、2008 年度全日本高等学校選手権大会で 3 位の成績をおさめた。近年は、「なでしこリーグ」やアメリカカレッジサッカーからの選手照会もある。高校時代に部活動としてサッカーに打ち込んだ部員のうち毎年約 8 割が、できればこの先もサッカーを続けたいと願っている。しかし卒業後すぐに「なでしこリーグ」に進路を選択する者はなく、毎年ほぼ全員が大学進学を目指している。実際、1996 年の創部から現在までの 13 年間で 65 名の卒業生（2008 年度卒業見込み者を含む）を送り出してきたが、そのうち 16 名（卒業見込み者数含む）が進学先の大学でプレーしており、残りの 49 名の約 75%が進学先でサッカーをしていない。

J 高等学校のケースは、大学で引き続きサッカーを続けたいという希望を持っているが、進学希望先の私立大学に女子サッカー部が存在しないため諦めてしまう生徒がいることを示している。すなわち「偏差値帯 55-64 程度の学力群の私立大学を希望する受験生」は、大学でサッカー部に入部したいと願っても断念せざる得ない状況があると考えられる。MARCHG ゾーンに女子サッカー部が存在しないことが、サッカーを継続できない原因のひとつになっている。

4.2.2. MARCHG サッカー一部創設の必要性和期待される効果

MARCHG ゾーンの大学に女子サッカー部が存在しないことは、高校女子サッカー全体の状況に影響を与えているだろうか。J 高等学校サッカー部以外の状況を詳しく考察する。

「2008 年度用晶文社高校受験案内」を資料に、2007 年度東京都女子サッカーリーグ（高校の部）加盟 30 高校における MARCHG の推定女子合格者数(2006)を算出してみる。算出方法は以下の計算式で算出した。

MARCHG の推定女子合格者数

$$= \text{MARCHG の合格者数} \times \text{女子の卒業生数} \div \text{卒業生数（男子＋女子）}$$

例えば MARCHG 合格者 100 人の場合、女子高校では推定女子合格者数 100 人となり、男子 5 女子 5 の割合の共学校の場合は 50 人となる。

上位 10 高校をランキングすると

- 1 位 吉祥女子 218 人
- 2 位 江戸川女子 152 人
- 3 位 大妻多摩 111 人
- 4 位 都立戸山 107 人
- 5 位 都立国際 79 人
- 6 位 学芸大付属 76 人
- 7 位 十文字 60 人
- 8 位 八王子 54 人
- 9 位 国際基督教 50 人
- 10 位 恵泉女学園 49 人

という現状になる。

そして、高校マトリクス図にその数値をバブルの面積で表して大学のマトリクス図にある MARCHG ゾーンにあてはめたのが図 10 MARCHG 合格者数上位校の分布になる。

この入試難易度の偏差地帯に位置する高校では、MARCHG ゾーンにたくさんの進学希望者が存在している。J 高等学校サッカー部のケースは、他の高等学校サッカー部でも当てはまるといえる。もし、MARCHG ゾーンにあてはまる高校選手が、大学でもサッカーを続けたいと希望した場合、MARCHG ゾーンに女子サッカー部がないことが与える影響は大きいといえるだろう。

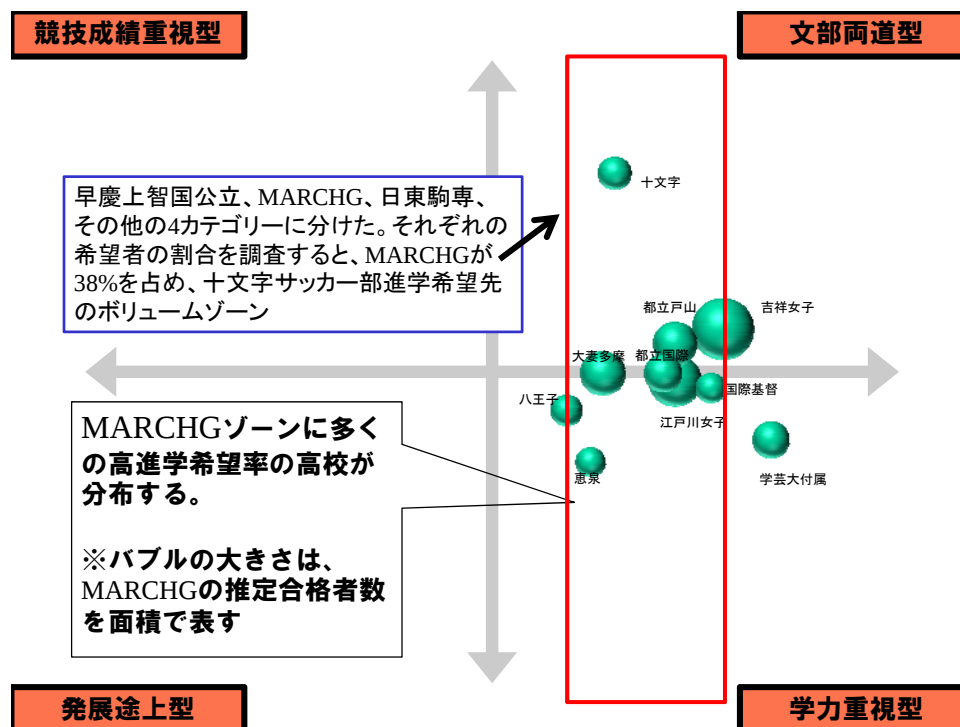


図 10 MARCHG 合格者数上位校の分布

先の考察で、東京都の高校は入試難易度と競技力の観点で見た場合、その分布状況は幅広いことが分かった。東京の高校女子サッカー部員の進学希望先はほとんどが私立大学という状況を考え合わせると、受け入れ先として考えられる MARCHG ゾーンの大学側に女子サッカー部がないことは、サッカーを大学でも続けたいと希望する高校生にとっては大きな問題であり、大学女子サッカーの発展にとっても大きなマイナス要因であると考察してきた。

東京都女子サッカーリーグ（高校の部）加盟校の分析結果において、J 高校は「文部両道型」に入る。その高校の約 75%の生徒が進学先でサッカーをしていない原因の一つは、受け入れ先の大学に「文部両道型」のチームが極端に少ないこと、MARCHG ゾーンに女子サッカー部がないことが原因となっていた。MARCHG ゾーンの選手の供給源と考えられる「文部両道型」や「学力重視型」に属する高校にも同様に、大学で引き続きサッカーに関わっていきたいという希望の生徒がいることも明らかになった。

そのことを考えると MARCHG ゾーンにサッカー部を創設することは急務である。優秀な人材を少しでも取りこぼすことなく大学サッカーに多く取り込むことは、その生徒の進路希望を叶えるためだけでなく、優秀な才能を持つ選手の発掘の可能性にもなる。ひいては日本女子サッカーのより一層の強化にもつながるであろう。

サッカー部を持つ偏差値帯 55-64 程度の学力群は国立大学には実際に存在する。しかし高等学校で高い競技実績を収めた女子サッカー部員にとっては、競技レベルの低い国

立大学サッカー部では十分な才能開花が望めないだろう。

「偏差値帯 55-64」にある国立大学の競技力を向上させることも一つの解決策であると考えられる。が、大学の分布状況を見ると体育・スポーツ系の学部学科などを持つ大学の競技力（偏差値）が高い傾向にあり、体育・スポーツ系の学部・学科を設置していない国立大学の競技力向上は期待することはできない。やはり、MARCHG ゾーンにある私立大学がサッカー部を創設され、女子サッカーの発展に貢献することに期待する。

4. 2. 3. MARCHG 女子サッカー一部創設に向けて

しかし一方で考えなければならないこともある。それは、MARCHG ゾーンの大学に女子サッカー部をつくるための取り組みについてである。本節では、MARCHG 女子サッカー一部創設に向けた施策について考えていきたい。

通常、大学のクラブ活動は学生の主体的な意志によって同好会から創設され、運動部へと昇格していくのが一般的だ。学生からの声が上がらなければ女子サッカー部がすぐに創設されることにはつながらない。大学の運動部を強化して、宣伝広告棟として活用し大学ブランド力を付ける戦略がある。その場合の運動部は大学側にとっては「経営資源」¹³⁾となる。特に MARCHG ゾーンの大学は受験生が募集定員を下回る大学ではないので「経営資源」として女子サッカー部が積極的に活用されていく根拠はないだろう。もちろん優秀な競技実績のあるスポーツ選手を大学に取り込むことは魅力であるが、入試難易度を下げるリスクは犯さないとも考えられる。

では、大学側からのアプローチのみを期待して MARCHG ゾーンに女子サッカー部が誕生するのを待つという受身姿勢ではなく、より自主的に女子サッカー部を創設させるためには、どのようなアクションが必要なのだろうか。筆者は、高校での指導者の教育こそ、重要であると考え。具体的には、「サッカー部のない大学に行っても、自ら先駆者となり創設する生徒」、「将来を見据えて、本当のキャリアを身につけることを第一に考える生徒」の育成・教育である。現在の日本の女子サッカーにおいては、競技活動のみで生計を立てていくのが困難であることは、実業団と呼ばれた企業の運動部が活動から撤退して久しい状況を見ても明らかである。その現実を我々、高校指導者はまず部員達に教えなければならない。また、大学はサッカーをするのみではなく、将来の真のキャリアを身につける場でもある。サッカーとキャリア形成の2本の柱が存在することを高校在学時から認識させていけば、女子サッカーに対するアクション型の人間を大学に送ることができる。送る側の我々高校指導者による「文部両道型」の生徒・選手の育成こそが、大学入学後自ら女子サッカー部を立ち上げることにつながる近道であるはずだ。また、生徒たちに指導するのは我々高校指導者であり、まず何よりもわれわれが、そのことを意識しながら、生徒・選手たちに接する必要があると考える。

4.3. 今後の展望（文部両道型／学力重視型）

2008年、立教大学にコミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科が設置¹⁴⁾された。また法政大学では2009年4月にスポーツ健康学部が開設予定¹⁵⁾である。明治大学にもスポーツ系の学部・学科の創設が検討されて久しい。近年のスポーツ産業界の注目度の高まりとその必要性が叫ばれる中、スポーツ系の学部・学科を持つ大学は今後も増加するものと考えられる。体育大系、スポーツ系の学部・学科・カリキュラムを有する大学はいずれも高い競技力を有し、「文部両道型」と「競技力重視型」に多く存在することはすでに述べてきた。そしてそれらの大学のうち、神奈川大学や武蔵丘短期大学、大東文化大学、関東学園大学といった大学には、創部当時から極めて短期間の年月で競技力を増してきた成長過程がある。

少子化がすすみ大学全入時代を迎えていることから、大学間での学生の獲得競争はますます激しくなってくると思われる。生き残りをかけた大学の経営がなされている中、大学が「経営資源」として運動部を活用していくことは時代を乗り切るための重要な手段である。女子サッカーの認知度が高まったことで、「経営資源」としての女子サッカーの存在価値が今後さらに注目されるだろう。優秀な監督やコーチを招聘し、全国から優れた高校生アスリート達をリクルーティングし、メディアを通して大学の広告棟として利用していく状況は大学女子サッカーでも起こりうると考える。MARCHG ゾーンの大学群もその例外ではなく、ブランド力アップのための経営努力を今後もしてくるだろう。よって MARCHG ゾーンにスポーツ系の学部・学科が開設されたならば、今後、現在の MARCHG 受験層の受け皿として機能し、サッカー経験者が入部することが予想され、MARCHG ゾーンに女子サッカー部が創部されて行く可能性は高い。(図 11) サッカー部が創部されて間もない時期では、競技力偏差値はあまり高いとは予想しにくい。しかし、MARCHG のブランド力を考え合わせると、その中でさらにスポーツ系の学部や学科を持つ場合は、近い将来競技力を増し「文部両道型」に移行していくものと考えられる。それは「文部両道型」の大学が少ないという問題の解決にもつながる。大いに期待したいところである。

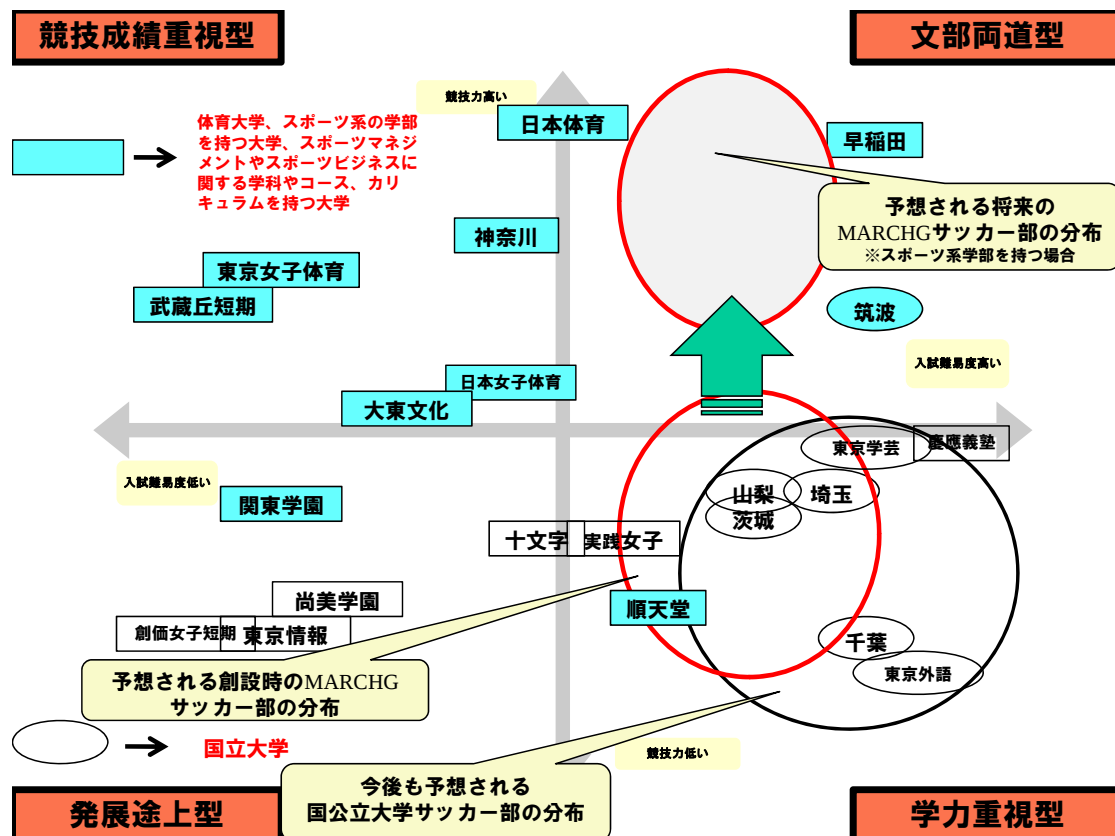


図 11 MARCHG・国公立の分布予想

一方、「学力重視型」はどのようなになるであろうか。

小泉「構造改革」は大学教育にも影響を及ぼした。その政策で『大学（国立大学）の構造改革の方針』という具体的な改革がなされ、2004 年度より国立大学の法人化が始まった。国立私立を問わず競争化がますます進み、大学が経営に運動部を活用していく可能性は十分にある。しかし実際のところ、国立大学について見ると、体育専門系の学部を持つ筑波大学を除いては、女子サッカーを始めスポーツ競技強化に関して明確な特別なスポーツ推薦制度などを設けているところはない。現在の国立大学は、運動部を学生獲得のための手段としては活用していないといえる。つまり、MARCHG でスポーツ系の学部・学科を持つ場合のように、今後競技力を増し「文部両道型」に移行していくとは考えにくい。国立大学は図 11 にあるように体育系の学部を持つ筑波大学以外は「学力重視型」に属しその領域にとどまると考えることができる。

2003-2007 の 5 年間の関東大学女子サッカーリーグにおける順位の変遷を以下のよう

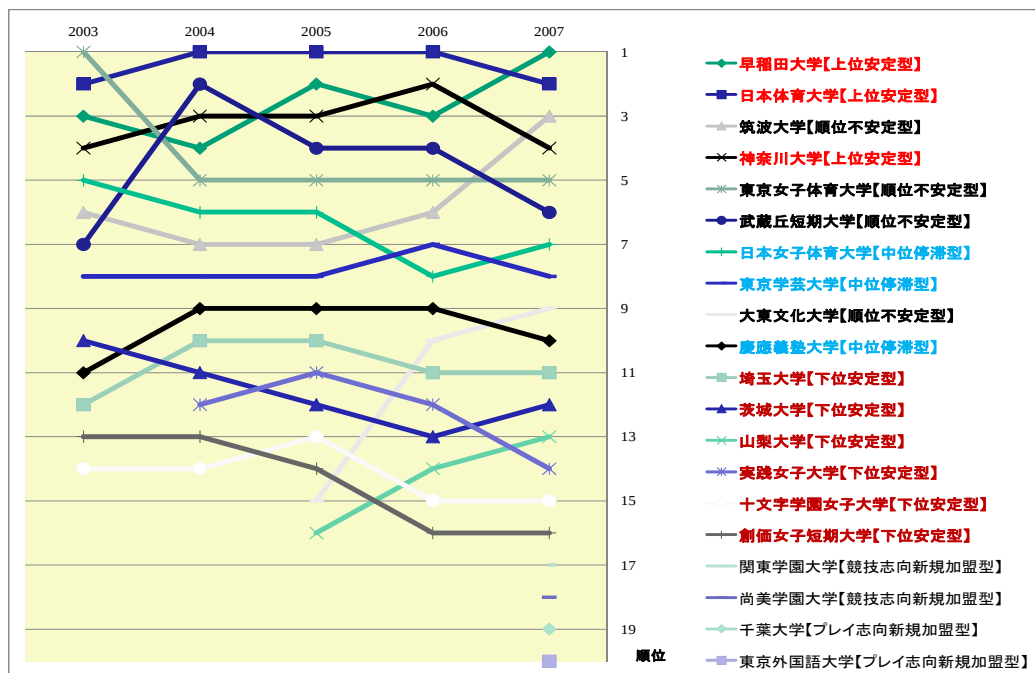


図 12 順位の変遷

順位の変遷パターンから、上位安定型・順位不安定型・中位停滞型・下位安定型の4つに大きく分類をした。それに、新規加盟型（順天堂大学と東京情報大学は、2008年度加盟のため除く）を加えて合計5つに分類することができる。尚、新規加盟型には上位を目指す競技志向新規加盟型とサークル的な活動を行うプレイ志向新規加盟型に分類することができる。まとめると、以下のようになる。

【上位安定型】

早稲田大学・日本体育大学・神奈川大学

【順位不安定型】

筑波大学・東京女子体育大学・武蔵丘短期大学・大東文化大学

【中位停滞型】

日本女子体育大学・慶応大学・東京学芸大学

【下位安定型】

埼玉大学・茨城大学・山梨大学・実践女子大学

十文字学園女子大学・創価女子短期大学

【競技志向新規加盟型】

関東学園大学・尚美学園大学

【プレイ志向新規加盟型】

千葉大学・東京外国語大学

順位の変遷の分類からも、「学力重視型」を構成する国立大学は、体育学群を持つ筑波大学と新規加盟校を除いて、停滞型もしくは安定型に属しており、その位置にとどまっていることが分かる。このことから、女子サッカーの認知度向上と共に国立大学に女子サッカー一部が新たに創設された場合、現存の大学と共に「学力重視型」にとどまり、構成していく要素と引き続きなっていくことが考えられる。

4.4. 今後の展望（発展途上型／競技成績重視型）

少子化の時代が到来する前から、運動部を学校経営の一部として活用する試みはこれまでもなされてきた。スポーツ推薦制度を利用し優秀な高校生アスリートを獲得し、資金を投資して練習環境を整える。優秀な指導者を招聘し、人材・環境・指導者を充実させる。その運動部の活躍がメディアを通して流れ、大学の宣伝広告棟としての役目を担うという構図である。

本論文において「発展途上型」と定義したタイプの全国の私立大学群を見ると、ラグビーや駅伝などの例を見ても周知のように、極めて短期間にその競技実績を伸ばし、その大学名を世に広め受験生を多く獲得した過去の実例がある。最近では、団体競技だけにとどまらず個人競技の注目アスリートを獲得し戦略として取り入れる大学も増えてきた。一度その実績がメディアを通して知れ渡ると、全国から優秀な高校生アスリート達が門を叩くという好循環が生まれるのも事実である。大学の生徒募集の観点からは大きなメリットがある。そしてまた、近年ではその学生アスリートを獲得する市場が海外にまで及び、留学生が活躍するなどの国際化が定着しつつある。

定員割れをさせない為の学生募集は「発展途上型」に位置する大学にとって、大学生生き残りの時代を乗り切るための最大の命題でもある。定員を割り込む大学の経営は補助金の交付に頼る割合が多い。しかし、先に触れた小泉「構造改革」によって大学間の学生確保の競争は熾烈を極め、競争に勝ち残れない大学は補助金減額という厳しい措置が下されることになる。定員割れ学部等の減額措置の割合は表 17 に示すように、年々厳しくなる一方だ。例えば収容定員に対する在学学生数の割合が 70%だとすると平成 19 年度には 12%の補助金のカット、平成 20 年度には 15%の補助金のカット、平成 21 年度には 16%の補助金カットとなる。大学生生き残り時代の到来と銘打たれるゆえんである。

表 17 定員割れ学部等の減額措置

平成19年度	減額措置(増減率)	6%	3%	0%	-3%	-6%	-9%	-12%	-15%	-18%				
	収容定員に対する在学学生数の割合	99-98%	97-95%	94-84%	88-84%	83-79%	78-74%	73-69%	68-59%	58- %				
平成20年度	減額措置(増減率)	6%	3%	0%	-2%	-4%	-6%	-9%	-12%	-15%	-19%	-23%		
	収容定員に対する在学学生数の割合	99-98%	97-95%	94-91%	90-87%	86-83%	82-79%	78-75%	74-71%	70-65%	64-59%	58- %		
平成21年度	減額措置(増減率)	6%	3%	0%	-2%	-4%	-7%	-10%	-13%	-16%	-19%	-22%	-26%	-30%
	収容定員に対する在学学生数の割合	99-98%	97-95%	94-91%	90-87%	86-83%	82-79%	78-75%	74-71%	70-67%	66-63%	62-59%	58-55%	54- %

※収容定員に対する在学学生数の割合は医学部を除く学部

※出所：日本私立学校振興・共済事業団発行、補助金課の資料(平成19年度の変更点及び分配方法)から抜粋し筆者が作成

「発展途上型」から「競技成績重視型」へ短期間のうちに移行していった大学では、毎年高校チームを招待しカップ戦を開いているところもある。その場で多くの高校と関係を築き、安定したアスリート供給源の確保を狙いとする一面も伺える。そして実際に高校生へのリクルート活動も行っている。そのようなリクルートの大学招待カップ戦や、全日本高等学校女子サッカー選手権大会などで活躍した名の知れた選手は、大学側からいわゆる声かけをされる。その内の何人かは、スポーツ特待生やスポーツ奨学生となり入学する。

このように「発展途上型」に属する大学群に属し、運動部を「経営資源」ととらえる大学は、定員割れや補助金カットという事態を避けるため、スポーツ奨学生や授業料の減免などの特待生制度を活用して学生を集め、収容定員に対する在学学生数の割合を上げることに力を注いでいる一面もある。また、そうして集めた学生アスリート達の活躍により運動部の競技成績向上に繋げる戦略をとっている。

再三述べてきたが、女子サッカーの認知度は近年急激に高まった。そして学問としてのスポーツ産業界の注目度の高まりとその必要性が叫ばれる中、スポーツ系の学部・学科を持つ大学は今後も増加するだろう。同時に女子サッカーの認知度の高まりを背景に、スポーツ系の学部を持つ大学における女子サッカー部創設の流れは続くはずだ。現に、J 高校サッカー部にはこの3年の間に全国各地より10近くの大学から、女子サッカー部創設の知らせと選手勧誘の書面が届いている。その多くが「発展途上型」または新規加盟の大学である。その多くがスポーツ系の学部や学科、スポーツ系のカリキュラムを有しているか、もしくは新たに新設している。2009年度には国士舘大学が女子サッカー部を立ち上げ関東女子サッカーリーグに加盟する。関東学園大学は、2008年度Ⅱ部リーグを全勝で終了し、来年度Ⅰ部リーグに昇格する。そのような大学は今後、選手・環境・指導者の整備を整え大学は実績をだし、関東学園大学やかつての武蔵丘短期大学、大東文化大学のように「発展途上型」から「競技成績重視型」へと移行していくだろう。

4.4.1. 新規参入大学は競争時代に

関東大学女子サッカーリーグがスタートした 1987 年は、女子サッカーの認知度が低く、本当に女子がサッカーをやるのかという質問を多く受ける時代でもあった。関東大学女子サッカーリーグ第 1 回目は、日本体育大学、東京学芸大学、筑波大学の 3 大学でのスタートで、体育大学という強みを最大限に活かし競技力をつけた日本体育大学が優勝をおさめ、その後 11 回連続優勝するなどして現在の地位を築いた。まだ発展初期段階にあった女子サッカーで常勝し、大学としても大学ブランド力アップなど、いろいろなメリットを最大限享受してきた。

一方で、これから新規参入する大学にとっては厳しい時代が来ることも予想される。大学の「経営資源」として女子サッカー部を捉え、新規参入してくる大学は、総てが狙い通りのメリットを享受できるか考えると疑問である。有力な高校生アスリートをリクルートし、リーグ戦で優秀な成績を収める戦略は、多くの大学にとっても同じであり、競合する大学が増え継続的に結果を出すことは難しくなる。

継続的に成果が出なければ大学の支援も受けられず、競技成績も低下するというリスクを伴う。今後、「発展途上型」から「競技成績重視型」を目指す大学は、ライバルの多い中からのスタートとなるであろう。よって極端な競技力向上を目指す戦略はメリットを簡単には享受できず、一考を要することを付け加えたい。

4.4.2. 今後の展望（サークル系運動部の下支え）

大学スポーツにおいて体育会系運動部のみでなく、サークル系運動部や同好会に参加する学生は多い。2008.11 現在の関東大学女子サッカーリーグ加盟各大学のうちどの大学がサークル系運動部なのかを調査した。各大学クラブのホームページなどから下記の観点で調査し、サークル系運動部と分類し認定した。^{11) 14) 15) 16) 17) 18) 19) 20) 21) 22) 23)}

- ・大学内では同好会の登録である。
 - ・練習日数が週 3 回以下である。
 - ・ホームページ上で「楽しく」や「誰でも気軽に」といった内容の活動がうたっている。
- 以上のいずれか一つ以上の条件を満たす場合をサークル系運動部と定めた。その結果を図 13 サークル系運動部に示した。5 つの大学がサークル系として活動することが明らかになった。

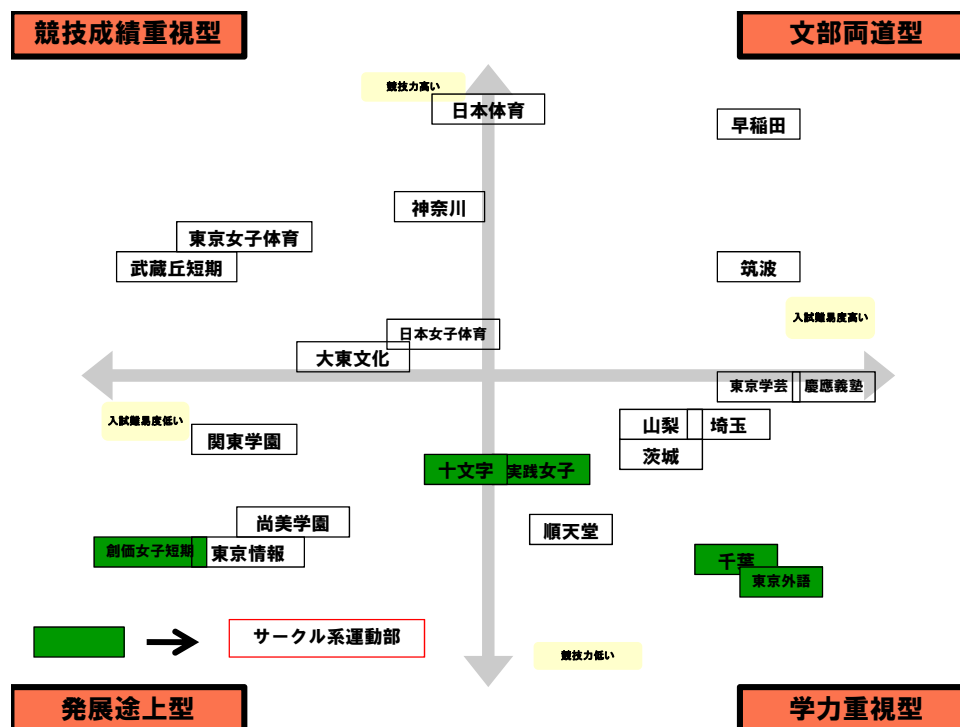


図 13 サークル系運動部

大学女子サッカーはまだ発展段階にあり、現在は体育会女子サッカー部もサークル系女子サッカー部も同じリーグに属している。今後女子サッカー人気を背景に、サッカー経験者が多く大学に進学し、サークル系女子サッカー部が多く創設されていく可能性が高い。サークル系女子サッカー部が多く創設されることは、加盟数増加の観点からも大学女子サッカー普及の意味で大いに歓迎されることである。「経営資源」としての女子サッカー部の活用による大学側のアプローチを待つばかりでは、積極的加盟数増加は望めないだろう。

大学におけるサークルや同好会などの承認のプロセスは多様だが、一般には次のような流れが考えられる。部員名簿と顧問の教員名簿を添えてサークル設立の申請を大学当局に行う。その後規約などを提出した後、承認される。そして、公認団体となり、学内の部室などが割り当てられ、大学の印刷物やホームページにその存在が知らされるようになる。そして何年かの実績が認められ体育会や校友会といったしかるべき統括組織の総会の承認を受け、体育会へと昇格する場合などが一般的である。

サークルから部への昇格のプロセスを考えると、沢山のサークル系運動部が創設されることに期待する。中長期的な展望では、今後、数多くのサークル系女子サッカー部が創設されて 4 象限にバランス良く分布するための要素、資源となっていくはずだ。「発展途上型」や「学力重視型」に属する大学群に、サークル系運動部がますます多く参入し、大学女子サッカー普及の下支えとなっていくであろう。

4.5. 近い将来、予想される大学女子サッカー分布

考察において、ユース年代の高校生が大学進学後も継続的に女子サッカーを続けて行く環境をつくるために、大学でサッカーを続けない原因を明らかにしてきた。そして高校生の受け入れ先を充実させるための解決策を模索し、大学リーグの加盟数を増加させ発展させていく必要性と4象限における今後の分布予想を述べてきた。まとめると次のようになる。

MARCHG ゾーンにおける女子サッカー部の創設の必要性

- ・高校生の受け皿として MARCHG ゾーンに私立大学サッカー部を創設することは急務である。

MARCHG 創設に向けて

- ・大学入学後自ら女子サッカー部を立ち上げる事が大切。我々高校指導者の果たす役割は大きい。

文武両道型

- ・MARCHG ゾーンの大学はそのブランド力などを強みに、近い将来競技力を増し「文部両道型」に移行することを期待する。

学力重視型

- ・国立大学に女子サッカー部が創設された場合「文部両道型」に移行することは考えにくく、現存の大学と共に「学力重視型」を構成するだろう。

発展途上型

- ・経営資源として女子サッカー部を活用しようとする大学群を中心に、今後も新たに女子サッカー部創設の流れは続くだろう。

競技成績重視型

- ・「発展途上型」に属する大学のうち、選手・環境・指導者の整備を進めた大学は実績をだし「競技成績重視型」へと移行することが予想される。

新規参入大学は競争時代に

- ・「発展途上型」から「競技成績重視型」や「文部両道型」への移行を目指す大学は、競争相手が多くなり、狙いの通りのメリットを簡単には享受できないだろう。

サークル系運動部

- ・サークル系運動部がますますその割合を増して行き、大学女子サッカー普及の下支えになる事が予想されるとともに期待される。

以上の考察結果をふまえ、5年から10年後の関東大学女子サッカーリーグの加盟状況を図14の近未来の大学女子サッカーの分布にまとめると、以下のように予想するこ

とができる。

現在、「文部両道型」が極端に少ないなどの問題点があるが、今後、大学女子サッカー加盟数は増加していくと推測される。また、その分布はある程度均一化されていくと考えられる。

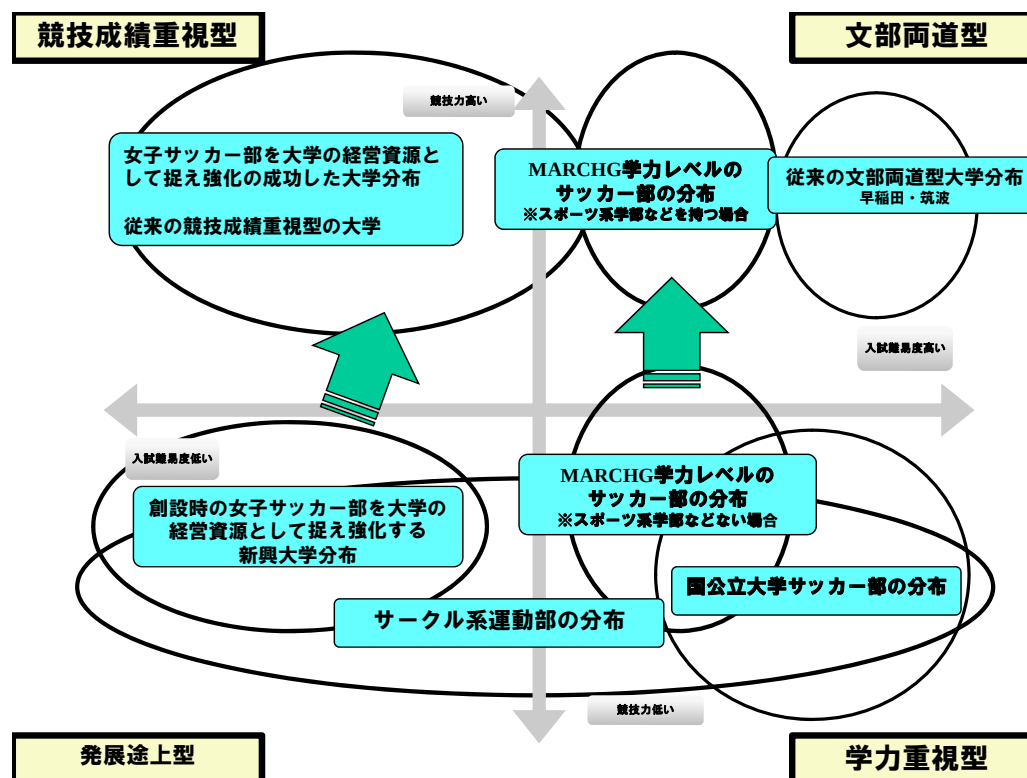


図 14 近未来の大学女子サッカーの分布

4.6. 今後の女子サッカー

4.6.1. 「なでしこリーグ」との交流

上述のとおり、日本の大学女子サッカーの加盟数は、4 象限にバランス良く分布しつつ増加していくものと推測される。大学女子サッカーのさらなる発展のため筆者が考える重要ポイントを、いささか唐突である節は否めないが以下に述べる。

第 1 章序論にあるように、アメリカの女子サッカーをみた場合、勝利と普及面で世界の女子サッカー界をリードしている。日本の代表チームの強化も順調である。そしてい

いわゆる「くびれ現象」と呼ばれるジュニアユース世代の登録の問題も解決に向かっていく。しかし、多くの高校生が大学進学後もサッカーを続けたいとの希望があるにもかかわらず、一部のトップ選手を除き高校卒業後サッカーから離れてしまう問題が生じた。このユース年代の問題を克服しなければ、日本女子サッカーの発展はないだろう。そこで日本女子サッカーのさらなる今後の発展を考えると、アメリカの成功例のように、高校生を受け入れる側の大学女子サッカーの充実が重要であると考えられる。

大学年代以降のアメリカ女子サッカーは、WリーグなどのクラブサッカーとNCAAが統括するカレッジサッカーのふたつが主流である。クラブサッカーは5月から8月初旬にかけて開催される。一方カレッジサッカーは、NCAAのシーズン⁵⁾の示すように8月末日から11月初旬にかけて開催される。

カレッジサッカーとクラブサッカーは、それぞれ異なるシーズンで開催され、多くの選手達が両クラブを兼ねてプレーをしている。このように、シーズン制を採用していることと、選手が両方でプレーできるというのがアメリカ女子サッカーの特徴的な構造である。

日本でも、なでしこリーグと大学リーグが重ならないようにしてみてもどうか。そうすれば双方にオフシーズンが生まれることによって、大学と「なでしこリーグ」の交流が進むことが期待される。日本のなでしこリーグ選手のほとんどがアマチュアである。一部のプロ契約の選手でもサッカー以外の仕事での収入がなければプレーをすることができない。シーズン制実現によって、アメリカのWリーグの選手がカレッジサッカーでコーチなどの副業を持つように、なでしこの選手が大学サッカーのコーチとして働きExtra収入を得ることが可能になる。

日テレベレーザの下部組織である日テレメニーナの寺谷真弓監督にインタビュー(08/12/12)をしたところ、大学女子サッカーが将来普及発展していくことに大きな期待を寄せていた。現在の日テレメニーナの選手の中でも「なでしこリーグ」ではなく、将来のキャリアも考えて大学女子サッカーを目指す者がいるそうだ。

現在、MARCHゾーンに私立女子サッカー部は存在しない。よって自分の競技レベルより低い国立大学女子サッカー部に所属するケースでも、優秀な選手が同時に「なでしこリーグ」でプレーすることができれば大学女子サッカーにとっても良いことであろう。現在でもそのような大学生なでしこ選手は存在する。浦和レッズレディースの安藤梢選手は筑波大学大学院に通いながらレッズでプレーを続けている。また、本年度筑波大学に合格したT学園高等学校のユース代表選手もプレーは浦和レッズで行う。その他、早稲田大学や日本体育大学に在籍する大学生が「なでしこリーグ」でプレーすることは過去にもあったことである。2重登録の問題を解決していかなければならないが、高い競技力を持つ選手が大学で学問を収めながら「なでしこリーグ」でプレーする、オフシーズンを利用して大学サッカーとも交流を持つことは、人的交流も盛んになって女子サッカー

全体の活性化につながると考えられないだろうか。

シーズン制を実行するためにはその他にも多くの問題点も含んでいる。現行の各種大会の開催時期や整理統合なども議論されなければならないだろう。その解決策の一つとして例えば、国民体育大会を大学生以下の大会にすることにも検討の余地がある。ユースの育成の場と捉えることで選手の発掘にも繋がる。

全日本大学女子サッカー選手権大会決勝は、毎年1月に行われる。4年生は就職活動をする時間がとれないという問題もある。シーズン制が導入された場合のメリットとして将来プロを目指さない学生アスリートは、就職活動や学業に集中したりする期間にもなることも考えられる。トップアスリートや競技志向以外の学生にとっては、フットサルや他種目をプレーする機会ともなり、いろいろな経験を積める期間となる。大学スポーツが、人格形成という人間教育の一面も持ち合わせていることを考えると、このように時間（期間）の配分を有効、かつ効果的につくることができたならば、女子サッカーにとって大きな意味を持つものと考えられる。

4.6.2. 女子サッカーの逆台形モデル

100年に一度というアメリカ金融恐慌のため先行きに不安はあるが、2009年の春をめぐりにアメリカのプロリーグが復活する予定である。2001年から2003年まで開催されたWUSAというプロリーグは3シーズンで活動を休止したが、今回はその経験を活かし新たにWPS (Women's Professional Soccer)という名でスタートする。

アメリカでは女子サッカーに限らず、学校が選手育成の場であり、プロチームはドラフト経由で有望株を獲得する仕組みになっている。もちろん、種目によってはベースボールのように選手育成の場としてのマイナーリーグも存在するので、学校が育成した選手をプロチームが活用するという構図がすべて成り立つわけではない。しかし、アメリカでは基本的にはプロチームはある程度完成された選手を獲得することになる。そしてドラフト制によって潜在能力の高い選手達をリーグ内に均等に振り分けリーグの戦力を伯仲させ、好ゲームを演出する手法を取ることで、アメリカのプロスポーツは繁栄してきた。今回スタートするWPSでもそれは例外ではない。Wリーグにしても選手をカレッジサッカーから獲得する仕組みは確立されている。今後も大学がファームの役割を果たすことは変わらないだろう。

ここ数年で増えてきてはいるものの、現在Jクラブで、なでしこリーグに所属するチームを保持しているのは、浦和、東京V、千葉、新潟の4クラブのみである。最近クラブを発足し、「なでしこリーグ」参入を目指す大分トリニータのようなケースが出ては来たが、Jリーグで傘下に女子サッカーを持っているクラブはまだまだ少ない。近年アメリカだけでなくヨーロッパやブラジルの女子サッカーの躍進がめざましい。なかでも

ヨーロッパで女子サッカーが飛躍的な発展を遂げているのは、各国のトップリーグが女子にも力を入れ始めた結果と言われている。

犬飼基昭会長は、北京オリンピックでのなでしこジャパンの大躍進を受け、これをきっかけにすべてのJクラブに女子のトップチームができれば普及にもつながると期待を寄せている。Jのチームにはインフラが整備されている。女子のチームの一番の悩みは練習場所の確保にある。また、専属の優秀な指導者確保が難しいなどの問題を抱えているが、そのような課題も克服できるだろう。

元女子日本代表選手の野田朱美氏も以下のように述べている。²⁴⁾ Jクラブに女子のトップチームができればプロの選手の練習を常に間近で見ることができ、高い意識付けにつながる。男子との練習試合を組むなどしてスキル、スピードアップの効果を得られるだけではなく、トレーニングマッチのマッチメイクにも事欠かない。そして、日テレベレーザの例のように、たくさんの質の高いコーチからより質の高い指導やコーチングを受けられるといったメリットがある。Jのブランド力も魅力で、同じユニフォームを着ることによって一層誇りも高まりチームに対する帰属意識も高まるであろう。全33クラブで女子チームが誕生すれば普及につながることはもちろんであり、女子サッカー全体の強化に直結することは間違いない。

そうなった場合、問題となるのはその選手の供給源であろう。総てのJ傘下のチームに選手を供給することは、高校生だけではまかなえないはずだ。また、人間的にもまだまだ未熟な、高校を卒業して間もない選手がプロとして収入を得てサッカーを職業とすることは、アスリートとしての選手生活を終えた後のキャリアを考えると果たして正しいことなのだろうか。現場で高校生を指導する筆者には疑問である。そのことを鑑みると、ここでも今後の大学女子サッカーが重要な鍵を握ると考える。

大学で学業と競技を両立した者が、トップ選手としてだけでなく、将来の女子サッカーを支える人材となっていくのではないだろうか。セミプロのなでしこリーグでは副業を持つなどしなければ安定した生計を立てていくことはできない。この状況を変えていくためには、女子サッカー界を発展させて、ある程度は職業として成り立つレベルまでに成熟させていく必要がある。女子サッカー界を発展させるためにはトップアスリートの選手生活を終えた者だけでなく、アスリートとしては開花しなかった大多数の者が、社会に出て活躍するようになり、女子サッカーを将来発展させる人材となって戻ってくることが必要であると考ええる。

平田竹男は、「選手の育成を考えると、裾野からだんだん上がっていき、代表選手になるというピラミッド型のモデルになるが、実は逆台形モデルが非常に大事である。代表選手になれないけれども、将来はメディアの仕事に携わりたい、あるいは競技団体に働きたい、指導者になりたい、審判になりたい、スポンサーになりたいなど、スポーツの好きな人には選手のみならず様々な就職先がある。」と述べている。『トップスポーツビジネスの最前線（スポーツライティングから放送権ビジネスまで）』：講談社

そして、以下のような「逆台形モデル」を図で表している。(図 15)

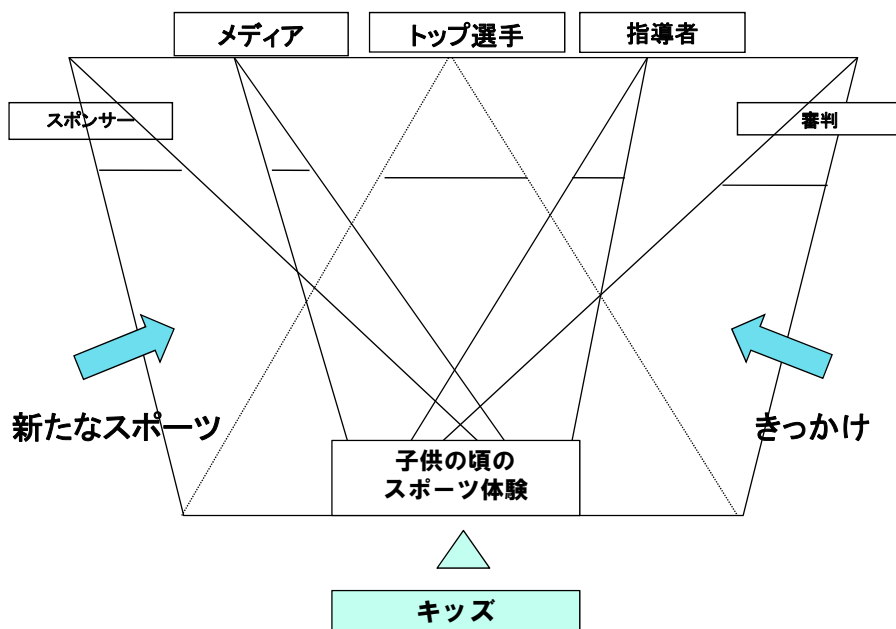


図 15 逆台形モデル

2008 北京オリンピックの「なでしこジャパン」の活躍により、高体連女子サッカー部の加盟校数も増加傾向にあるなどの現象が現れ、ジュニア、ジュニアユースをはじめ高校生年代に、サッカーに対する関心が高まっている。その勢いを活かし普及が加速度を増して進むであろう。そして女子サッカーがさらに大きく育ち、その結果としてスポーツ産業の担い手、あるいはファンの両方に大きく相関して女子サッカー版逆台形モデルが構築されていくことを期待する。

将来の職業、就職のため専門的な知識や学問を学ぶ場が大学である。高等学校までに基礎資基本の学習を積み重ね、大学で専門性を深め社会で活躍できるよう学問を修得する。これまでは、高校生女子サッカー選手が大学でも競技生活を継続したいとの希望を持っていても、その受け皿が非常に少なく、大学でサッカーを継続して行うことのできる環境が整っているとは言えなかった。大学女子サッカーが成長段階にあるがために、将来の職業と女子サッカーとの結びつきが弱まっていた一面があった。やはり将来のキャリアスキルを学ぶ場である大学女子サッカーが発展しなければならない。女子サッカーアスリートを受け入れる大学女子サッカーリーグのチーム数が増えなければ、女子サッカーにおける逆台形モデル(図 16)は構築されないだろう。

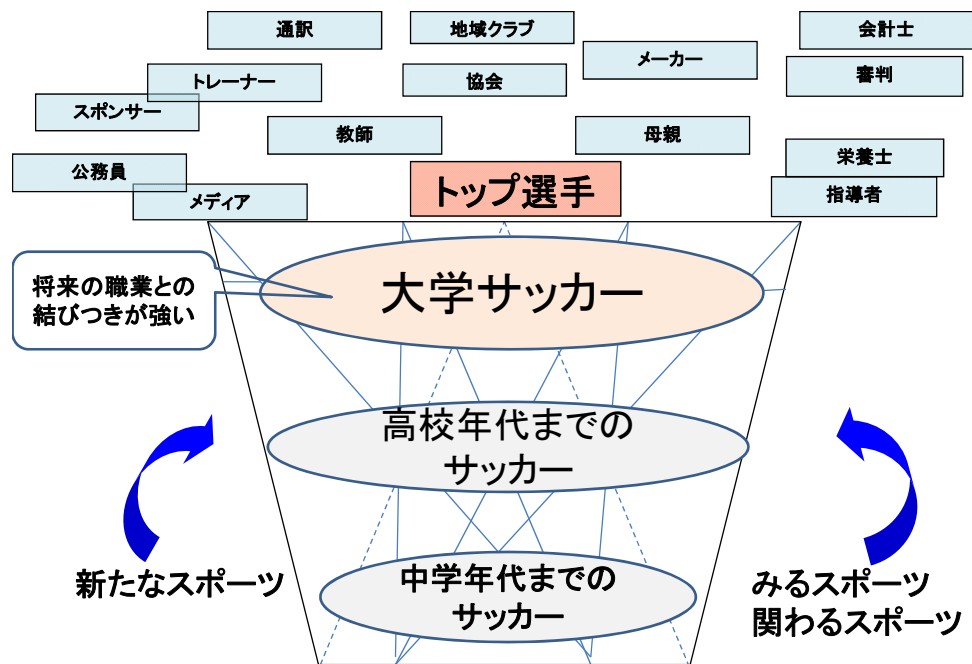


図 16 女子サッカーにおける逆台形モデル

大学女子サッカー発展のためには「なでしこリーグ」がより発展することも必要ではないか。スポーツとビジネスというある面相反する両方が、各クラブにおいて上手く機能していかなければならないと考える。特にビジネス部門は重要である。これからは、スポーツとビジネスをつなぎ合わせることでできるマネジメント人材を育成、発掘することが、女子サッカートップリーグを発展させる重要な要素になる。いままでプロスポーツ界は、名選手と呼ばれた引退後の選手や、ずっとその世界で活躍してきた人間にこだわりすぎてきたのではないか。輝かしい経験を持った人材はもちろん必要不可欠であり、その功績は計り知れない。しかし、女子サッカーにおける経験や選手としての実績よりも、ある一面では専門知識がありマネジメント能力のある人材を登用することも重要になってくると考える。期待や夢、感動といった無形の価値を商品化しそれをビジネスにつなげる人材も必要なのである。

関東大学女子サッカーリーグの分析でも、スポーツ系の学部・学科を持つ大学が増加傾向にあり、女子サッカー部でも競技力を増してくるだろうと考察した。その中でも特にスポーツマネジメントやスポーツビジネスといった比較的新しい学問が女子サッカー発展に貢献する人材づくりに大きく寄与していくだろうと考える。Ｊリーグも従来の企業依存型から浦和レッズやアルビレックス新潟、モンテディオ山形、大分トリニータのように、バックに親企業を持たない地域密着型の自立したチームが台頭してきた。来年度からＪ２に昇格するファジアーノ岡山の木村正明社長は、外資系金融会社サラリー

マンであった。²⁵⁾ ファジアーノ岡山の木村正明社長は大学で学業に専念しなければ、クラブのマネジメントの基礎を築けなかったであろう。多くの大学に女子サッカー部が創設されて、学業と女子サッカーに打ち込む環境が発展していき、多くの者が女子サッカーと将来の職業の結びつきを強く考えることになるだろう。スポーツビジネスをはじめ、多種多様な学部を持つ大学が多く大学女子サッカーリーグに加盟してくることへの期待は大きい。

専門の学問を学び、経営の基礎的知識の業を修得する場は、主に大学である。プロリーグがない女子サッカー界だからこそ、大学で学業とスポーツを両立する意味がある。大学女子サッカーがアメリカ NCAA の学業とスポーツの両立のための制度の良い面を取り入れるなどして、多種多様な人材の受け皿となり多くの大学が加盟することは、トップアスリートを養成するだけでなく女子サッカー発展のための逆台形モデル構築を目指すために重要であると考えらる。

4.6.3. 最後に

北京オリンピックでの「なでしこジャパン」の大躍進は、つい 10 年前には考えられなかったことだ。その活躍が女子サッカーを全国に認知させるに至った。北京オリンピック初戦のニュージーランドでは期待と予想に反して苦戦し引き分けるものの、次戦のアメリカ戦の後半からは日本女子サッカーの良いところが出るようになる。続く一次リーグ最終戦のノルウェー戦では試合開始から相手を圧倒し 5-1 で快勝する。そして準々決勝では地元中国と対戦し 2-0 で勝利した。中国やアメリカといった女子サッカー強豪国に対し、互角以上の戦いをした。続く準決勝では再びアメリカと対戦し 2-4 と敗れるものの善戦し、3 位決定戦ではドイツに 0-2 で敗れたが、ボールを動かし主導権を握りすべてを出し切った感のある納得の試合内容であった。

アジア競技大会で金メダルをまだ取ったことのない日本であるが、急速に競技力を付けている。注目すべきは、この北京オリンピックを迎えた時点での FIFA ランキングがアメリカ 1 位、ドイツ 2 位、ノルウェー 5 位と世界のトップクラスであったことだ。日本は出場国の中で最も平均身長が低く体格差もあるにもかかわらず、上位ランクのチームに対して、臆することなく果敢に攻め続け主導権を握った。日本女子サッカーの方向性が見えたオリンピックであり、日本の女子サッカーが世界のトップクラスに近づいていく可能性を感じさせた。

しかし課題はまだ多い。協会登録選手数はアメリカ 1 位、ドイツ 2 位、ノルウェー 6 位に対して日本は 11 番目とまだまだ低いのである。オリンピックベスト 4 になっても日本の女子サッカーの課題はまだ「普及」にある。サッカージャーナリストの大住良之氏も（JFA news、2008/10「オリンピックベスト 4」の女子サッカー課題は変わらない）²⁶⁾で述べている。

そもそも本研究の問題意識は、筆者が顧問として指導している東京 J 高等学校サッカー一部において、夏の高校選手権大会終了と同時にサッカーを辞めてしまう選手が大半を占めることにあった。ごく一部のトップ選手を除く多数の生徒が、高校卒業後サッカーからいとも簡単に離れていくようでは日本の女子サッカーの課題である「普及」の問題は解決されない。

2007 年度全日本大学サッカー選手権大会にゲストとして来ていた、ジェフ千葉の巻誠一郎選手のコメントが印象に残る。「自分は大学サッカーで自主性を学んだ。自主性とは自分で考えること。どうやったら試合に出られて、どうやったら試合に勝てるのか。自分の中で課題を見つけて、自分自身で考えながら練習に取り組めた。自分にとって、大学サッカーがなければ今の自分はない。」

女子サッカーでも、東京電力女子サッカー部マリーゼの丸山桂里奈選手や浦和レッドダイヤモンズレディースの矢野喬子選手のように、大学サッカーを経験した後に代表クラスのアスリートとして開花する場合がある。これからは、大学女子サッカーが発展し、大器晩成型の選手を育成する役割も担って行くこともあるだろう。

筆者は、MARCHG ゾーンにサッカー部を創設していくために、主体的に考え行動できる自主性のある学生アスリートの存在が鍵を握ると先に述べた。このことは大学女子サッカー発展のために非常に重要な要素であると考ええる。ユース年代の高校生が女子サッカーを続けていける環境をつくることは、高校生を送り出す側にいる私達の役割ではないだろうか。つまり学業とスポーツを両立させる高い意識を高校年代に養わせ、大学女子サッカーに送り出すことこそが我々高校指導者の責務なのである。

全国高等学校女子サッカー選手権大会での成績を伸ばしている J 高等学校に、年代別のトップクラスアスリートが、スカウトを受けるわけでもなく自ら受験を希望するケースが近年目立つようになった。その選手達の志望動機は、競技と勉学の両立である。アスリートとしての目標は代表選手そしてオリンピック出場にあるが、選手を終えた後のキャリアを見据え、高校から大学への進学を視野に入れている。高校女子サッカーのレベルが向上してきたことから、クラブ出身のアスリートが、トップチームを選択する場合と、高校サッカーを選択する 2 つの選択肢が生まれてきている。女子サッカーのキャリア形成に多種多様な選択肢があるのは大変重要なことである。将来女子サッカーを支えるこうした人材の受け皿となるためにも、分布に偏りのある現状を打開して、大学女子サッカーの急ピッチの普及が望まれる。

高校サッカーの普及・発展が大学の発展につながり、大学の普及・発展が、高校サッカーのさらなる意識向上につながる。両者は相互により影響を与え合いながら発展していくべきものであると筆者は考える。

第5章 結論

本論文では、高校・大学における女子サッカーの発展に関する研究を行った。

第一章では、研究の背景を述べた。世界の女子サッカーの発展はめざましい。日本女子サッカーに関しても、2008 年にも北京オリンピック出場を果たしベスト 4 という過去最高の成績を収めるなど近年急速な発展を遂げている。

しかし、ユース年代の女子サッカーに関しては問題点が存在する。筆者は、ごく一部のトップ選手を除く多数の生徒が高校卒業後サッカーから離れていくことに問題意識を持ち、このような現状を踏まえると、高校生の受け皿である大学女子サッカーが発展することで、大学に入ってからでも女子サッカーを継続する選手が増えると考えた。

そこで本研究では、大学女子サッカーにおける現状の問題点を明らかにするとともに、我が国における大学女子サッカーのさらなる発展策を探ることを目的とした。

第二章では、分析の手法を述べた。本稿において大学女子サッカーの現状を分析することで、問題点を抽出しようと試みた。その方法として、入試難易度と競技力という 2 つの観点にフォーカスし、「関東大学女子サッカーリーグ加盟大学」と「東京都女子サッカーリーグ高校の部加盟高校」を、文部両道型、競技力重視型、発展途上型、学力重視型の 4 タイプに分類した。

第三章では、大学と高校の分類した結果を記した。

第四章では、分類した各大学と高校をマトリクス図にプロットして考察した。「関東大学女子サッカーリーグ」では、学力軸で見た場合のいわゆる「MARCHG（明治・青山学院・立教・中央・法政・学習院の人気私立大学群）」ゾーンに女子サッカー部がないことが明らかになった。そして、文部両道型が極端に少ないこと、体育やスポーツ系の学部・学科を持つ大学はいずれも高い競技力を有することも明らかになった。

一方、選手の供給源である高校は、大学の分布に比べ、上記の 4 タイプに広く均一に分散する。女子高校生に、多くの MARCHG ゾーンの私立大学を受験希望するものが存在することを考え合わせると、一部のトップ選手を除く多数の生徒がサッカーから離れていく原因の一つとなっていることが伺われた。

今後の関東大学女子サッカーリーグ加盟大学の分布を予想すると、女子サッカーの認知度の高まりから MARCHG ゾーンにも部が新設されと考えられる。そして MARCHG ゾーンに女子サッカー部が創設されることで、「文部両道型」が極端に少ないという問題点解決に繋がるだろうと考える。またスポーツ系の学部などがない国立大学に新たに部が創設された場合は、「文部両道型」に移行することは考えにくく、現存の大学と共に「学力重視型」を構成すると予想される。「発展途上型」に属する多くの大学は「経営資源」として女子サッカー部を活用する事が考えられる。そして今後も新たに創設の流れは続き「発展途上型」に属する大学のうち、選手・環境・指導者の整備を進めた大学は競技

実績を出すだろう。「競技成績重視型」や「文部両道型」への移行を目指す大学は競争相手が多くなると予想される。そして「発展途上型」と「学力重視型」には、サークル系運動部が増え大学女子サッカー普及の下支えになることを期待する。

5年から10年後の関東大学女子サッカーリーグを予想した場合、加盟数は増加し広く分布していくだろうと予想される。では近い未来、さらに日本の大学サッカーを発展させていくためにはどうしていけばよいのだろうか。アメリカでは、NCAAがカレッジ女子サッカーリーグを統括し、学生アスリートに対するシステムが整備されている。学業成績に関する規則は特に重要視されている。そこに、学問を修めながら部活動でサッカーを行う大学女子サッカーの存在意義のヒントがあると考え、本論文では、日本の大学女子サッカーリーグの加盟校数順調に発展したと仮定して、大学女子サッカーの発展のための重要なポイントを上げた。

まず「なでしこリーグ」と大学サッカーの交流である。シーズン制を参考に、開催時期をずらせば、なでしこ選手が大学のコーチを務めるなどの人的交流が盛んになる。

そして、女子サッカーにおける逆台形モデルの構築を考えた。大学女子サッカーが、多種多様な人材の受け皿となり、多くの大学が加盟することは、トップアスリートを養成するだけでなく女子サッカー発展のために重要であると考ええる。

第6章 参考文献

- 1) サッカーランキング 廣済社 杉山茂樹著
- 2) 第3回 FIFA 女子ワールドカップ USA 報告 (その成功の理由) 小林美由紀 サッカー医・科学研究 第20巻 (2000)
- 3) 女子サッカーの日米比較研究(I)-アメリカ女子サッカーの歴史と現状について- 東明, 有美 入口, 豊 山科, 花恵 大阪教育大学紀要 第IV部門: 教育科学 巻: 51 号: 1 165-180
- 4) 日本スポーツ界に授けるマーケティングのヒント (競技をいかにお金に替えるか) 大坪正則 スポーツマネジメントの時代を迎えて 創文企画
- 5) NCAAホームページ <http://www.ncaa.com/> (2008/9/22 アクセス)
- 6) 女子サッカーブリッジホームページ <http://www.girlsoccer-bridge.com/> 2008/7/10 アクセス
- 7) 「財団法人日本サッカー協会」HP <<http://www.jfa.or.jp/index.html>> (2007/12/22 アクセス)
- 8) 女子サッカー選手の体格と体力に関する研究 大西信行 p. 251 社団法人日本体育学会 日本体育学会大会号 No44A
- 9) 全日本大学女子サッカー連盟オフィシャルサイト <http://homepage2.nifty.com/juwfa/> 2008/9/10 アクセス
- 10) 河合塾ホームページ <http://www.kawai-juku.ac.jp/> 2008/5/10 アクセス
- 11) 筑波大学ホームページ <http://www.tsukuba.ac.jp/> 2008/10/10 アクセス
- 12) 東京都高体連女子サッカー部ホームページ <http://home.g06.itscom.net/ul8joshi/index.htm> 2008/8/16 アクセス
- 13) 岡本純也(2006)「大学運動部の現在」『現代スポーツ評論 14 変貌する大学スポーツ』 p. 36-46
- 14) 立教大学ホームページ <http://www.rikkyo.ac.jp/> 2008/8/20 アクセス
- 15) 法政大学ホームページ <http://www.hosei.ac.jp/> 2008/11/10 アクセス
- 16) 十文字学園女子サッカー部ホームページ <http://jumonjifc.web.fc2.com/2008/11/9> アクセス
- 17) 実践女子大学 <http://www.jissen.ac.jp/sonoma/a04a22a02a16/a04a22a02a16a04/2008/11/9> アクセス
- 18) 創価女子短期大学 <http://www.soka.ac.jp/swc/campuslife/kagai/club/index.html> 2008/11/9 アクセス
- 19) 千葉大学女子サッカー部ホームページ http://www.geocities.jp/chiba_girls_soccer/new_home.html 2008/11/9 アクセス
- 20) 東京外語大学女子サッカー部ホームページ

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~tufsgirlssoccer/2008/11/9> アクセス

21) 茨城大学女子サッカー部ホームページ

<http://www.geocities.jp/ibaibajyosaka/top.html> 2008/11/9 アクセス

22) 埼玉大学女子サッカー部ホームページ <http://jumbo11.web.fc2.com/2008/11/9>
アクセス

23) 早稲田大学ホームページ <http://www.waseda.jp/top/index-j.html> 2008/10/10
アクセス

24) JFA NEWS 2008 年 12 月号

25) 日本経済新聞 2008 年 11 月 11 日夕刊 ; 岡山に愛を込めて②

26) JFA NEWS 2008 年 10 月号

謝 辞

本論文は、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科、平田竹男教授のご指導なくしては完成に至ることはありませんでした。ご多忙な中、構成から論文の細かな表現まで懇切丁寧にご指導いただいたことに対して感謝し、厚く御礼申し上げます。また、様々な助言を賜り、多岐に渡りご指導いただいた副査の中村好男教授にも御礼申し上げます。同じく副査の堀野博幸準教授には、女子サッカーの現場での経験を含め多方面に渡りご指導いただき深く御礼を申し上げます。

そもそも、早稲田大学大学院の門を叩いた私の動機は人生の折り返し地点にさしかかり何かをやりたいという曖昧なものであった気がします。研究の世界で言えば、そのような目的はあり得ないもので、当然ながらそのようないい加減な私には沢山の問題点が降りかかってきました。本研究が完成に至るまで様々な面でご協力頂いた平田研究室の同期ゼミ生とはいろいろ励まし合い議論してきましたが、元来研究のバックボーンとなる基礎的知識が薄い私がゼミの仲間について行くには正直辛い時期ばかりでした。やはりその中で力となったのは、その仲間達であり、若きエースの川名光太郎氏、内田亮氏、河合慎祐氏でありました。振り返ると、大学院は学問を修めるところであり友達をつくる場所ではないというお叱りを仲間から何度も受けたことを思い出します。しかし、平田先生をはじめ仲間達との絆があったからこそ前に進めたと思いますし、やはり忘れてはならない何より大切なものを得ることができたと改めて感謝する次第です。

最後になりますが、本研究にあたり、データ整理に協力してくれた十文字中学高等学校サッカー部員、データ提供や情報提供してくださった、東京、埼玉の高体連サッカー部の皆様、日本サッカー協会 CHQ（当時）と学生連盟の職員の方、東京都サッカー協会、「なでしこリーグ」監督、コーチの皆様、アメリカサッカー留学のブリッジの皆様には御礼申し上げます。そして、研修という形態で勉強させていただく機会を与えてくださった十文字学園と職場で多大な迷惑をかけているにもかかわらず多岐にわたる懇切丁寧なアドバイスと指導、助言をしてくれた十文字中学高等学校教職員にはあらためてこの場を借りて御礼申し上げます。